

初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ（上）

山内, 昭人

九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 教授 : 西洋現代史、インタナショナル（国際社会主義）史

<https://doi.org/10.15017/10310>

出版情報 : 史淵. 145, pp.1-55, 2008-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

初期コミンテルンとアムステルダム・ ニューヨーク・メキシコシティ(上)

山内 昭人

はじめに

- 1 コミンテルン在外ビューローの構想および創設
- 2 アムステルダム・サブビューローの創設および解散(以上、本輯)
- 3 パンアメリカン・エイジェンシー創設前史
- 4 ニューヨークにおけるパンアメリカン・エイジェンシー
- 5 メキシコシティにおけるパンアメリカン・エイジェンシー
- 6 パンアメリカン・エイジェンシーの解散

おわりに

はじめに

前稿「初期コミンテルンとシベリア・極東」⁽¹⁾に続いて、本稿ではモスクワを起点として日本社会主義運動との接触をめざす「西回り」からの、運動の末端よりはむしろ大本の側に焦点を定めた考察を行う。

すでに解明したように、「西回り」はアムステルダム～ニューヨーク～メキシコシティのルートであり、それは片山潜とリュトヘルス(S.J. Rutgers)との1916年以來の盟友関係(それにフレイナ[L.C. Fraina]が加わる)がきっかけとなって開拓されたものであった⁽²⁾。

アムステルダムでは、1919年11月から1920年5月までコミンテルン・アムステルダム・サブビューローが設立され、リュトヘルスはモスクワのコミンテルン本部から全権を委任されてその書記を担った。その時彼は、在米中の片山および在横浜の杉山正三と連絡を取りあった⁽³⁾。またニューヨークでは、1921年

1月前半からコミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシーが組織され、片山はその議長となった。同年3月末日からは片山はメキシコシティに移り、当地で活動する（7月初めにフレイナが再合流する）とともに、ニューヨークに残った在米日本人社会主義団員やすでにアメリカから一方はロシアへ赴いた吉原太郎、田口運蔵、他方は日本へ戻った近藤栄蔵らと連絡を取りあいながら、団員のさらなる日本行ないしロシア行を執行しつつあった。片山もまた、コミンテルン本部によるエイジェンシー解散画策のさなか10月末に新たな任務のためにモスクワへ向けて当地をあとにすることになった⁽⁴⁾。

このように初期コミンテルンが「西回り」で日本社会主義者と最初に接触もったのは、二つのコミンテルン在外ビューローを介してであった。

本稿では最初に、創設直後のコミンテルンがいわゆる世界革命の観点から世界各地に活動の拠点づくりをめざし、まずは西洋における在外ビューロー創設を構想し、どれほどのビューローが創設されていったかを概括的に捉える。次に、アムステルダム・サブビューローの創設から解散に至る経過をたどり、当初それがいかに過大なほどの期待をかけられ、そしてコミンテルン本部の方針転換によりいかに一方的に権限縮小、さらに解散決定に至ったかを解明し、同サブビューローの暫定的な評価を試みる。最後に、コミンテルン本部によってすべての在外ビューローが解散させられる際、例外的に創設が認められたパンアメリカン・エイジェンシー、それはアムステルダム・サブビューローと部分的な継承関係をもち、また片山が深く関与するのだが、同エイジェンシーの創設から解散に至る経過を明らかにし、併せて活動実態の全体的解明へ向かって歩を進める。

すでに私は両組織に関する基本史料の編纂を中心とした基礎的研究を済ませており⁽⁵⁾、本稿ではアルヒーフ史料を本格的に活用してコミンテルン本部との関係を中心に両者の活動の包括的把握を試みる（ということは、とりわけアムステルダム・サブビューローに関しては思想・政治的立場の分析を踏まえた立ち入った考察には及ばず、課題が残ることになる）。その中から初期コミンテルンのインタナショナルな運動にまつわる多くの問題点が摘出されることになる

のだが、とくにコミンテルン本部側の問題点が深刻であったことが浮かび上がる。

1 コミンテルン在外ビューローの構想および創設

創設されたばかりのコミンテルンがめざした国際的な活動の拠点づくりに関して、すでに1919年早秋コミンテルン執行委員会(ИККИ)議長ジノヴィエフが西洋の在外ビューローについて構想していた。干渉戦争下で国外との接触が極めて困難な中、また各国で共産党が未だほとんど形成されていない中、最初の国外との接触機関として期待された在外ビューローの構想は、自筆の日付なしの草稿に書き留められた。以下、それを A. カンによって独語訳された訳文を参照しながら全訳する⁽⁶⁾。

I 西欧とアメリカにおける共産主義運動の発展に対して、とりわけさまざまな国の共産党の実際的工作の調整のために、ИККИは西方に以下のビューローを創ることを決定した。すなわち、

1) ベルリンに(西欧書記局)——ドイツ、スイス、イタリア、フランス、ベルギーのために。

2) オランダに——オランダ、イギリス、アメリカ、オーストラリア、他のヨーロッパ外の国々のために。

3) ウィーンに——オーストリア、ハンガリー、チェコスロヴァキア、そしてソフィアにビューローが創られるまで暫定的にルーマニアとバルカン諸国のために。

4) ソフィアに——ルーマニア、ブルガリア、セルビア、モンテネグロ、ギリシアのために。

II 在外ビューローはИККИの補助機関であり、個々の党とИККИとの関係における仲介的役割を果たす。

III ИККИ 在外ビューローは以下の任務を課される。すなわち、

1) 当該諸党の組織的、宣伝的、とくに文献的、そして互いに通知しあう

仕事に力を貸すこと；2）個々の共産党内のさまざまな潮流間の意見の相違や争いの除去；3）分裂した分派がコミンテルンの綱領に立ち、ИККИのすべての根本的決議を承認し、実際に遂行し、共産主義的規律を守り（少数派は多数派に従う）、そして統一的で強力に中央集権化された党の全決議を実現する用意がある限りにおいて、これらの分派の統一；4）階級闘争の個々の行動の取り決め、さまざまな国のプロレタリアート共同行動の準備と組織化、これらの目的のために当該共産党の代表の特別な協議や会議の招集——これらの国々の党の中央委員会との合意に従って；5）ИККИ刊行物および当該国の他の共産主義文献の新たな刊行と普及；6）資金の保管と仲介；7）国際労働運動および共産党の実効性についての資料収集、ИККИの文書館および図書館のための収集；8）政治闘争下で指導してきた同志たちに物質的手当を交付し、合法的防衛を組織し、拘留されている人たちの解放に力を貸すなどの任務をもった共産主義的赤十字の組織化。

Ⅳ さらに ИККИ はさまざまな国の共産主義組織に物質的支援をただ在外ビューローを通じて果たすだろう。これらの目的のためにそれぞれのビューローに特別な基金が築かれるだろう。あらゆる国の共産党が外からの物質的支援なしで済ます目的を追求しなければならないことから出発して、ИККИはその代表——在外ビューロー——に初めは以下の要求のため資金援助をさせる。すなわち、

1）共産主義文献の編集のため；2）非合法的党新聞、雑誌、小冊子の助成金を与えるため；3）当該の在外ビューローによってその必要性が認められる限り、新しい合法的組織の創設のため；4）プロレタリアートのとりわけ取り残された層（農業労働者など）の下での煽動や宣伝に力を貸すため；5）兵士の下での煽動のため；6）指導的同志たちの扶助のため。

ИККИ 在外ビューローは、可能な限り緊密な相互接触をお互いの中で、および ИККИ とで保ち、規則的に少なくとも月1回、さまざまな国における労働運動と共産主義活動に係るすべての資料とともにその実効性と繰越高について詳細な事業報告を ИККИ へ送ることを義務づけられる。

本史料には在外ビューローの構想があますところなく描かれている。けれども、計画どおりにはいかなかったし、変更もあった。そこには、状況の困難などの外的要因だけでなく、内的要因もあった。その一例を予め略記しておけば、構想には「在外ビューローは可能な限り緊密な相互接触をお互いの中で、およびИККИとで保ち」（傍点引用者）とあったが、その相互接触は外的障害だけでなくИККИの意図的な操作によっても促進されない場合があった。そもそもИККИが各ビューロー創設にあたって与えた任務は各ビューロー間で相互了解されることがなかったし、またИККИによる肩入れの濃淡や変化によってビューロー間に不平等の関係が生じた。それらの問題に立ち入る前に、各在外ビューローの創設について概括的に記しておく。

早くも1919年4月14日のИККИビューロー会議において、「ハンガリーとバイエルンからの最新報道に関連してさまざまな国にИККИ支部(Отделение)を開設するロシア共産党中央委員会決議に関するジノヴィエフの報告」がなされ、「第3インタナショナルのビューローをキエフ、ハンガリー、バイエルン、そしてスカンディナヴィアに創立することを非常に重要かつ不可欠と認める」ことになり、それぞれのメンバーも以下のように指名された。キエフにはバラバノヴァ（А. Балабанова; A. Balabanoff; この任務のためИККИ書記を一時休職する）、ラコフスキ(C. Racovski; ウクライナ・ソヴェト政権首班)、サドゥール（J. Sadoul; ロシア共産党（ポ）中央委員会附属外国人グループ中央連盟フランス語グループ）、ハンガリーにはルダシ（L. Rudas）、ベーラ・クン（Béla Kun）、オシンスキー（本名オボレンスキー）（Н. Осинский [В.В. Оболенский]）、そしてスカンディナヴィアにはヘグルント（Z. Höglund）、ストレム（F. Ström）、チルブム（K. Kilbom）であった（バイエルンについては候補者問題は未解決）。筆頭に挙げられたキエフ支部は、上記報告にあったように「[[ロシア]南方への革命運動の重心移動およびバルカンとの関係を確立する必要性のため」であった。その上、別版の報告によれば、その重心移動は「ハンガリーとバイエルンの出来事と関連して」であった⁽⁷⁾。

このように在外ビューローのスタートは「世界革命」への対応が主に意識さ

れてのものであった。

1) ハンガリーのビューロー

1919年3月21日のハンガリーのソヴェト共和国宣言を受けて、「ハンガリーに第3インタナショナル・ビューローを設立する」こととなり、スタッフは上記3名であった⁽⁸⁾。けれども、ブタペシュトのビューローは公式とは言いがたく、政権を担ったハンガリー共産党の指導部と個人的にはクンが実質的に担っていたと言えよう。同年8月1日の共和国崩壊とともに活動は途絶える⁽⁹⁾。

2) バイエルンのビューロー

創設決定がなされた前日の1919年4月13日にレーテ共和国を宣言したバイエルンに、第3インタナショナル・ビューローを組織することになったが、その時創設されたか、スタッフは誰かなど、今のところ情報は見あたらない⁽¹⁰⁾。おそらくビューローは創設されることなく、同年5月3日の共和国崩壊を迎えたのであろう。

3) キエフのビューロー（南部支部）

同ビューローの創設決定は、ハンガリー・ソヴェト政権をはじめ東南ヨーロッパ諸国との関係確立のため、および南部の外国人共産主義者グループとその他の組織を指導するためキエフにビューローを組織するためであり、その担当者に上記3名が任命された。1919年5月4日にそのビューローを南部支部（Южное отдел ИККИ）と呼ぶことが決まり、その管轄下に（1918年12月連合国部隊が到着した直後のオデッサでウクライナ共産党（ボ）オデッサ州委員会のメンバーが非合法下に集まり、占領軍兵士の中への煽動活動に関する同党中央委員会およびロシア共産党（ボ）中央委員会からの指令を実施するために創設された）外国人プロパガンダ団は入っていく⁽¹¹⁾。

1919年7月22日、8月5日のИККИビューロー両会議では、南部ビューローのために200万ルーブリとか100万とかの支給が決められている⁽¹²⁾。

1920年1月21日のИККИ小ビューロー会議の決定により、改めてウクライナ[ハリコフ]に支部[新南部支部]を組織することとなり、同支部に対してИККИによって近い将来のために総額で500万ルーブリが融資されることになる。メンバーは上記3名のうちバラバノヴァが抜けて、ルドニャンスキ（E. Rudnyánszky）、ミルキチ（И. Милкич; I. Milkić）、コーン（F. Kon）が加わる⁽¹³⁾。

1920年8月11日のИККИ小ビューロー会議の決定により、ミルキチとサドゥールにひと月でИККИ南部ビューローを解散し、オデッサに信任された個人から成る細胞を組織することが委任される。それは後述する8月8日のИККИ決定を即刻実施するための措置であった⁽¹⁴⁾。

4) スカンディナヴィア委員会（ビューロー）

スカンディナヴィア委員会には「前史」があった。ロシア2月革命勃発が報じられるやベルンにあったツィンメルヴァルト運動の委員会ISK（Internationale Socialistische Kommission）は、革命の現場に少しでも近づくためストックホルムへ移り、1917年7月にその議長グリム（R. Grimm）がいわゆる「グリム事件」で役を降りたあと、書記のバラバノヴァとヘグルントらスウェーデン社会主義左派によって担われていった。1918年9月にはバラバノヴァがツィンメルヴァルト運動の行き詰まりを打開するためロシア、さらにはスイスへ向かい戻って来られなくなったあと、ISKの活動はスウェーデン左派によって継続された⁽¹⁵⁾。コミンテルン創立大会におけるツィンメルヴァルト運動の清算＝コミンテルンへの発展的解消後も（1919年6月時点でも）非公式ながらISKメンバーのИККИとの連絡は取られ、すでにバラバノヴァが発つ前からソヴェト・ロシアからの資金の管理がISKメンバーに委ねられていた⁽¹⁶⁾。

スカンディナヴィア委員会の組織化および構成について、最初に本委員会を初めて本格的に解明した（スウェーデン国籍を取得したロシア人史家）カンによって説明すると、こうである。

構成メンバーは、スウェーデン社会民主左党の指導者トリオである上記3名であり、議長となったのは党書記ストレムで、彼は1919年1月、在ストックホ

ルムのソヴェト・ロシア政府代表ヴォロフスキーの追放後、同政府により全スカンディナヴィアのための公式の政治的代表（正式には、ソヴェト連邦共和国外務人民委員部代表）に任命されていた⁽¹⁷⁾。また、党執行委員会メンバーであり、ロシア通信社（ロスタ [РОСТА]）ストックホルム支部長でもあったグリムルト（O. Grimlund）も参加した⁽¹⁸⁾。

グリムルトのファン・ラフェステイン（W. van Ravesteyn）宛書簡によって補足すれば、上記議長その他、ヘグルントが出納管理者、グリムルトが書記となった「第3インタナショナル・ストックホルム・ビューロー」は、まさに悪い財政状態にあった⁽¹⁹⁾。

「スカンディナヴィア」を冠した組織である限り、その構成は十分とはいえず、次に当事者によって説明を続けると、こうである。カルリンスキ（K. Karlinski；本名未詳のスウェーデン人）およびフリート（G. Fried [M. Heimo]；フィンランド人）の署名のあるИККИ宛1920年7月16日付「第3インタナショナル・スカンディナヴィア委員会の活動についての報告」によれば、当初ストックホルムで3名から成る同委員会が選任され[それは上記のスウェーデン・メンバーであろうし、1919年4月14日のИККИビューロー会議決議によっていた]、それは1919年10月に同じ目的で活動していたもう一つの委員会 [未詳] と統合し、6名の構成となった。1920年4月末に同委員会は、一ロシア人同志と二、三のノルウェー人同志が加わった会議をもち、そこでスカンディナヴィアでのより徹底した活動に達するためノルウェー人同志を加えて組織を完備する提案が採択され、それがИККИへ送られた。同じ時期、ИККИも委員会の構成に関する決議を行った⁽²⁰⁾。それは1920年4月24日のИККИ小ビューロー会議の決議をさし、委員会構成はヘグルントのほか、フィンランド共産党代表（未決定）およびノルウェー共産党代表ハンセン（A.G. Hansen）となり、スウェーデンにおける外務人民委員部代表を兼務していたストレムは外れた⁽²¹⁾。

「報告」を続けると、そのИККИからの通知を受けた同委員会は、1920年7月3日に改めて会議をもち、以下の提案を採択して、ИККИがそれを承認することを望んだ。すなわち、1)第3インタナショナル・スカンディナヴィア・ビュー

ローは3名から成る（それらの名はノルウェー同志を通して〔コミンテルン〕第2回大会で通知される）⁽²²⁾；2）ビューローはストックホルムに配置するが、しかし必要とみなされる場合はクリスチアニアへ移されるであろう；3）ビューローは二つの事務所をもつ、一つはストックホルム、一つはクリスチアニアに；4）……；5）……；6）……

ここで着目すべきは、ИККИ、すなわち上からの決定を鵜呑みにするのではなく、自分たちなりに検討し、判断を示したことである。そのことはИККИによるアムステルダム・サブビューロー解散決定へのスカンディナヴィア・ビューローの対応にもみられることになる（後述）。

なお、スカンディナヴィア委員会（ビューロー）が果たした重要な役割について付記しておく。彼らは郵便仲介だけではなく、西洋各国各地への資金の仲介および運送的役割を果たした。それはスウェーデンの地理的、内政的そして国際的有利な状況だけではなく、スウェーデン左派、とりわけストレムの組織能力と個人的な清廉潔白が、彼を一時的にインタナショナル（少なくとも北欧と北米）の国外財務管理者にした。ドイツとの関係が秩序づけられず、ロシアの西方近隣国が軍事的敵でありつづける限り、スカンディナヴィアの同志たちは大きな役割を割り当てられたのである⁽²³⁾。

ジノヴィエフが1920年7-8月開催のコミンテルン第2回大会に向けて用意したИККИ報告の一部「さまざまな国における我々の補助ビューロー」には、スカンディナヴィア、中欧、バルカン、オランダ、南ロシアの5地域に支部局が組織されたとある⁽²⁴⁾。南ロシアは上記南部ビューローをさし、オランダについては章を改めて取り扱うとして、残りの中欧およびバルカンについて概説しておく。

5）ウィーン・ビューロー（東南ビューロー）

すでにコミンテルン創設時（1919年3月）に「東南欧の党・グループ間の交流のためにウィーンに一ビューローが設立されるべきこと」がИККИによって決定され、戦渦をくぐり抜けてコミンテルン創立大会のさなか参加したオース

トリア共産党代表グルーバー（本名シュタインハルト）(Gruber [K. Steinhart]) が、ビューロー組織化のための全権と必要な資金を得て直ちに帰国の途についた。が、途中（8月30日）、彼はルーマニア軍当局に逮捕され、スパイ容疑で投獄された。ハンガリー・ソヴェト共和国崩壊によって直接的にウィーンの国際ビューローの必要性がさらに高まったけれども、ビューローの形成は遅れた⁽²⁵⁾。

1920年1月20日、ようやくグルーバーはウィーンに戻ってきたが、資金なしであった。やっと組織化が始まった時、ドイツ系オーストリアのИККИ代表に指名されたポーランド共産党員プロンスキ (M. Broński) が直接創設を援助したという。のちに、同ビューローの指導者にハンガリー・ソヴェト共和国の軍事人民委員であったベーラ・サント（偽名：ディートリヒ、フィリップ）(Dietrich; Philipp [Béla Szántó]) が指名された⁽²⁶⁾。

アジベコフらによれば、ビューローの任務は、1) 地域の共産主義諸党とИККИとの関係の維持、2) 情報とプロパガンダ活動における共産党への援助の組織化、3) ビューローを通してИККИから共産党への金の支給、であった⁽²⁷⁾。けれども、設立当初にアムステルダム・サブビューロー（後述）へ送ったオーストリア共産党指導部（トマン [K. Tomann (Toman)] とシュタイハルトが署名）の決議文をみると、西欧書記局（下記）との上下関係が如実に示されていた⁽²⁸⁾。すなわち、ウィーンの臨時ビューローは組織的かつ政治的に完全に西欧書記局の管轄下に置かれ、同局によってビューローの資金運用の管理機関として委任されたオーストリア共産党は一代表を同局へ送り、月1回の同局総会へ出席することになっていた。そしてビューローは、一方で西欧書記局の報告類を南欧諸党へ伝え、他方で加盟諸党からの報告を毎月同局へ送る任務を担い、オーストリア、ボヘミア、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、ブルガリア、ギリシア、トルコの諸党との関係を維持していた。

そのような関係構築には上記プロンスキ（西欧書記局の一員でもあった）の介在が推定され、また当初の資金が西欧書記局から提供されたことが窺われる。果たしてその上下関係が機能したのか、機能したとしていつまで続いたのか、

は説明が求められるが、1920年2月1日にウィーン・ビューローによって創刊された『コムニスムス』の誌面を見る限りでは、その関係は密接のようにみえない。ほぼ週刊で出された同誌の論調は、左翼的とみなされ、レーニンの『共産主義内の「左翼主義」小児病』（1920年6月刊；独語版、同年7月刊）において批判の俎上にのせられたことで、よく知られている。ビューローの思想と行動は、アムステルダム・サブビューローとの間に親近感を抱かせた。例えば、『コムニスムス』は二度にわたって「第3インタナショナルの文書」のタイトルで計7点を掲載したが、すべてがサブビューローの文書を後述する機関紙『ブレティン』創刊号から再録したものだけであった⁽²⁹⁾。

その一方で、ウィーン・ビューローの活動開始とほぼ同時にバルカン共産主義連盟および「バルカン・ビューロー」（下記）がソフィアに創設されたことは、諸組織間の関係を複雑化し、活動等の競合の問題を抱えることになる⁽³⁰⁾。この問題は後述するアムステルダム・サブビューローと西欧書記局とのなわばり争いと同類であった。

1921年7月23日、ИККИ小ビューローは『コムニスムス』の停刊を決定し、さらに1922年3月8日には、ИККИ幹部会会議でウィーン・ビューロー自体の解散を決定する⁽³¹⁾。

6) 西欧書記局

ベルリンの西欧書記局の設立のために任命されたのはトーマス（別名ジェームズ・ゴードン、本名ライヒ）(Thomas; James Gordon [J.S. Reich])であり、それは語学力と西欧における地下活動の経験、さらにいく人かの指導的ポリシェヴィキ [ジノヴィエフ、ラデク、ブハーリンら] と個人的に知り合っているゆえにであった⁽³²⁾。ИККИ 予算委員会の文書によると、1919年9月9日にトーマスへ宝石類25万ルーブリ相当が提供されており⁽³³⁾、それが創立資金とみなされる。すでにモスクワを発ったジェームズ [=ライヒ] に対して、10月25日のИККИビューロー会議で「ドイツの党と出版事業のために」200万ルーブリ相当の貴金属を急使 (Л. Осипов) によって送らせることが決まり、さらに外務

人民委員部にも「ドイツの党用に」100万ルーブリまでの融資を依頼することになった⁽³⁴⁾。

それに先だってИККИは、1919年5月30日にトーマスへ宝石類30万500ルーブリ相当、10万ドイツ・マルク、10万スウェーデン・クローナ、モルヒネ7,500ルーブリ相当、そして6,500ルーブリという上記以上の資金を提供していた⁽³⁵⁾。それは4月29日のИККИビューロー会議でライヒがドイツに派遣されることになり、その時25万から30万ルーブリまでの範囲での支給が決まり、そして5月15日の同会議で50万ルーブリまでに増額した決定によっていた⁽³⁶⁾。その時彼に与えられた任務は「出版-情報活動のため」であり、それは西欧書記局の主要活動にもなり、実際ドイツに出版センターが創られていく。

ライヒは「1919年秋の終わりに」ベルリンに到着した⁽³⁷⁾。西欧書記局の最初の公式行動は、1919年10月付声明「ロシア・プロレタリア革命、ソヴェト・ロシアは危機に瀕している！」を発したことであろう⁽³⁸⁾。その中で、ポリシェヴィキ革命2周年を記念し、干渉への抵抗をヨーロッパ労働者へ訴えていた。

メンバー構成は、活動の展開に応じて変化したとも言えるが⁽³⁹⁾、コミンテルン文庫の中の西欧書記局ファイル(PIACPII、フォント499)にはアムステルダム・サブビューローほどには整備された資料が残されておらず、メンバー構成をはじめ全般にわたってつきまとうある種の不明瞭さは、後述する指導者ライヒおよび組織そのものの性格に由来した、と私はみている。

それはともかくとして、ライヒ自身ののちの証言によれば、ライヒ以外のメンバーは、ラデク (K. Radek; ドイツにいる限りであり、1920年1月に帰国)、レーヴィ (P. Levi)、タールハイマー (A. Thalheimer)、プロニスキ (Zürcher の名で; 別名 M. Braun)、ミュンツェンベルク (W. Münzenberg)、フックス (E. Fuchs; 出納管理者) であり、協力者としてクレプス (Krebs; Felix Wolf の名で)、アブラモヴィチ (A.E. Абрамович; A. Albrecht の名で) がいた⁽⁴⁰⁾。

メンバーはコミンテルンから派遣された要員と当地のドイツ共産党 (KPD) 員とからほぼ構成されていたのだが、後述するように両者の間には時として溝があった。

西欧書記局の任務は、明示的ではないが、ヴァトリンとヴェーナーのアルヒーフ史料を駆使しての初の本格的研究によれば、革命の準備に対する政治的中心を創設することだけではなく、むしろモスクワとドイツ（より広い意味での西欧）の接続機関（Verbindungsapparat）を築くことであったとある⁽⁴¹⁾。

その接続工作に関連して、「同志トーマス」ののちの証言を引き出した編者ニコラエフスキーによって「理論家でも政治家でもなく」「実践の人」であったと記された⁽⁴²⁾ライヒにとって、非合法ないし半合法下にあったドイツにおいて非合法活動が得意分野であり、ヴィザをはじめ旅行関係書類の調達に力が注がれた。

ライヒの最初の数週間の活動に関する情報が、ИККИ で働いていたエストニア共産党員（V. Kingisepp）からジノヴィエフへ上げられた1919年12月30日付報告書にみとられる。すなわち、「リュトヘルスが貴重品も持ってうまく[モスクワからベルリンへ] やって来ている。彼はそこでフックス、レーヴィそしてライヒと会った。ドイツとオランダでいま良き関係が築かれている。フックスに彼は40万マルク引き渡した[後述]。金は至急必要とされている。ライヒは、自分たちが一つは合法的、もう一つは非合法的な二つのビューローを設立したと通知する。急使業務はオランダ、スカンディナヴィア、オーストリア、バルカンと、そしてスイスを越えてフランス、イギリス、イタリアとともに整備されている」と⁽⁴³⁾。

その合法的なビューローはハンブルクに置かれ、より重要な非合法のビューロー（＝西欧書記局）はベルリンに置かれた。前者は、ドイツ語圏で共産主義宣伝のためにコミンテルンの機関紙類やポリシェヴィキ指導者の著作を販売するコミンテルン書店をドイツにおいて設立するため、当地の出版社（Carl Hoym）を買収した出版局であり、直ちに独語版『共産主義インタナショナル』を刊行しはじめた⁽⁴⁴⁾。

西欧書記局とアムステルダム・サブビューローとの対立については、次章で取り上げる。

7) バルカン・ビューロー

1920年2月2日のИККИビューロー会議決定により、バルカン・ビューローがソフィアに設立されることになった⁽⁴⁵⁾。実は、そのひと月前の1月15日に、ブルガリア共産党のイニシャティヴでバルカン共産主義および社会主義諸党会議がソフィアで開催されていた。それは1910年1月ベオグラードでの第1回、1915年7月ブカレストでの第2次に次ぐ第3回会議であった。ブルガリア共産党によってユーゴスラヴィア、ギリシア、そしてルーマニアの社会主義諸党が招待されて（ただしルーマニアは代表を送れず）開催された同会議は、コミンテルンへの加盟を決議し、自分たちのバルカン社会主義連盟をバルカン共産主義連盟へと改称することとした⁽⁴⁶⁾。

このようにバルカンの場合は、前史をもったバルカン共産主義連盟の形でバルカン諸党間の古くからの関係を復旧することがめざされ、同連盟の執行委員会は暫定的にブルガリア共産党中央委員会が務めることとなり、それが実質的に上記バルカン・ビューローの機能を果たしたとみなされる。現に、同連盟の規約第2条には次のようにあった。「バルカン共産主義連盟は共産主義インタナショナルのバルカン諸支部、つまりブルガリア、ユーゴスラヴィア、ルーマニア、そしてギリシアの連盟である。／注記：アルバニアに共産主義インタナショナルの支部が創設されるならば、その時それはバルカン共産主義連盟の一員となるだろう」⁽⁴⁷⁾。

1920年8月初めのИККИ決定により、いったん在外ビューローは解散させられることについては後述するとして、アジベコフらは在外ビューローも含めたИККИの初期組織構造を、以下のように総括した。コミンテルン第2回大会までの時期、ИККИの組織構造はただ創設されたにすぎず、第2回大会でジノヴィエフが次のように言ったとおりだった。「最初の年、我々はプロパガンダの団体にすぎなかった：中央集権化された機関として執行委員会は未だ機能しなかった。それはロシアの組織であった」と⁽⁴⁸⁾。

確かに「中央集権化」を規準にすれば、「プロパガンダの団体」にすぎなかつ

たと言えなくもない。がしかし、そのような評価はスヴァーテックが捉えたようなコミンテルン創立前史からの流れ、すなわち制度的および個人的連続性をみえにくくする⁽⁴⁹⁾。また、「ロシアの組織」であったと、全体としてはそう言うしかないが、やはり（「インタナショナル」の精神においてばかりか実際の組織においても重要な先駆となっていた⁽⁵⁰⁾）インタナショナリスト（интернационалисты）や彼らの一部をそのメンバーに加えていた在外ビューローの可能性を見えにくくしてしまう。次章では、その可能性に関わる問題をもみていくことになる。

2 アムステルダム・サブビューローの創設および解散

1) アムステルダム・サブビューローの創設

1919年9月8日、ИККИ ビューロー会議はオランダおよびドイツにコミンテルンの在外支部を開設することを決定した⁽⁵¹⁾。ドイツの西欧書記局については上述したが、オランダに関しては、9月16日のИККИ ビューロー会議において、（コミンテルン創立大会が終わる直前に肺炎で倒れ、転地療養して8月末にモスクワに戻ってきたばかりの）リュトヘルスへオランダ帰国旅費として4万ルーブリ、党活動費として50万ルーブリを支給することが先に決定された⁽⁵²⁾。続いて9月28日のИККИ ビューロー会議で、ИККИ のオランダ支部を組織することとなり、同支部用に2千万ルーブリを支出することが決まった⁽⁵³⁾。ただし、ИККИ 予算委員会の文書には、1919年9月14日付でリュトヘルスへ提供した資金が以下のように異なって記されている。1万スウェーデン・クローナ、5千ドイツ・マルク、宝石類405万ルーブリ相当、5万ポンド⁽⁵⁴⁾。決定額と実際の支出額のずれは、しばしばのことであった（注34参照）。

帰国したリュトヘルスによって1919年12月15日にまとめられた出納文書によれば⁽⁵⁵⁾、10月15日のロシア出発に際しての所持金として、上記4項目のうち前半の2項目のみが記されて、後半の2項目は記されていない。後者はサブビューローのための秘密事項であったろう。その他に、140ポンドと7千ルーブ

りが記されているが、それらは個人所有のもので、後者は1918年7月にロシアに向けて日本を発つ時所持していた2万ルーブリの残金であった。

本稿では資金にまつわる問題は正面から取り上げず、後日の検討に委ねることにするが、上記の金額はリュトヘルス自身によってすべてギルダーに換算されているので、参考のために記しておく。

5,000 マルク	[換算率]	f. 0.084	f. 420.—
10,000 スウェーデン・クローナ		f. 0.5615	f. 5,615.—
140 イギリス・ポンド		f. 10.06	f. 1,408.40
7,000 ルーブリ		f. 0.0696 ⁽⁵⁶⁾	<u>f. 487.20</u>
			f. 7,930.60

1919年9月28日のИККИビューロー会議の第3議題「オランダにおけるИККИ支部の組織化とそれへの指令について」においてなされた決定事項は、のちのトラブルと深く関わる内容なので、全訳しておく⁽⁵⁷⁾。

1) 同志リュトヘルス、ロラント-ホルスト(H. Roland Holst)、パネクーク(A. Pannekoek)、ホルテル(H. Gorter)、ウェインコープ(D.J. Wijnkoop)および[ファン・]ラフェステインから成るオランダ支部(Голландское Отделение)を組織する。報酬はオランダ支部の一存で彼らによって算定する。同志ホルテルとパネクークのためにその上一定額を特別基金で支出する。

2) オランダでの支部用に2千万ルーブリを支出する。

3) 支部に、できるだけ1920年1月に共産主義インタナショナルの会議を招集することを委任する、そのためにストックホルムのИККИ支部との予備的關係に入る。

4) 『共産主義インタナショナル』を出版することを委任し、必要な場合は、この雑誌の名称を変更することを許可する。

5) 文書館と図書館を組織することを委任する。

6) あらゆる国と連絡をつけることを委任する。

7) オランダの支部に、特別な場合は一刻の猶予もなしに、第3インタナショナルを代表して独立して意見を発表する全権を与える。

8) ИККИのためにそこへ自らの代表を派遣する可能性がない場合は、同志リュトヘルスに共産主義インタナショナルの会議でИККИ全権代表である全権を与える。

9) 以下の会議議事日程を定める：①ИККИ報告、②現地報告、③あらゆる国での共産党の形成、④議会主義とソヴェト権力、⑤労働組合インタナショナルの形成。

オランダのメンバーはすべてИККИによって指名されていたのであり、とりわけホルテルおよびパネクークへの期待は過大とも思えるほど高い。さらに、1920年1月に国際会議をできるだけ招集することを委任されていたのであり、そのことにも関連する第6、7、8項をみれば、彼らに与えられた全権委任は極めて重い。

また、議事日程の⑤は、リュトヘルスも出席した前日9月27日のビューロー会議で、コミンテルンの名で国際労働組合大会を招集するというロシア共産党中央委員会決議を基本了承し、その準備に入ることになったことを受けてのものであった⁽⁵⁸⁾。

今回の10月14日ИККИビューロー会議は、議題「ИККИオランダ支部の命名およびこれに全権を与えられた支部(Отделениеуполномоченного)を任命することについて」のみで開かれ、リュトヘルスも出席し、以下が決定された⁽⁵⁹⁾。

1)「アムステルダムにおける共産主義インタナショナル支部」と命名する。

2)この支部におけるИККИ全権に同志リュトヘルスを任命し、ИККИを代表してありとあらゆる行動を指令する。

同じく10月14日の午前3時には、レーニンは翌15日の出発を控えたリュトヘルスと会見し、リュトヘルスからの要請でオランダ共産主義者宛の短信を独語でしたためた⁽⁶⁰⁾。そこには、干渉戦争下での「はなはだ困難な」情況が記されており、それゆえにアムステルダム・サブビューローへの期待は上記のように極めて高かった。

しかし間もなく、のちにリュトヘルスが回想しているように、「国際情況は好転して、その書簡はアクチュアルな意義を失った」⁽⁶¹⁾。そのことに比例して、

サブビューローの意義も薄れていく（後述）。

モスクワからアムステルダムへの途次、リュトヘルスはリーガ〜レヴァル〜シュテッティンを経由してベルリンに立ち寄った。レーニンの要請でリュトヘルスは、ドイツにおけるコミンテルン代表ブロンスキおよびレーヴィ、フックスを訪問した。リュトヘルスは、KPDの苦しい財政事情を知り、貴重品の一部を売って、フックス、レーヴィを信用して彼らへ40万マルクを与え、そして貴重品類を一度にオランダへ運ぶのはあまりに危険なためベルリンの出納管理者フックスのもとへ残した。

すぐに大中二個の宝石がオランダへ運ばれ、25,975ギルダーで処分されたが、それが最後となり、KPDが残りの最低限500万マルク＝約15万ギルダー〔上記リュトヘルスの換算だと、4万2千ギルダー〕を着服した。そのためアムステルダム・サブビューローは、活動を始める前からすでに厳しい財政困難に陥った⁽⁶²⁾。

オランダ国境の街(Oldenzaal)に24時間足止めされたあと、1919年11月5日にリュトヘルスはアメルスフォールトの妻バルタの元に到着した⁽⁶³⁾。病み上がりの体を休める間もなくリュトヘルスは、そのアムステルダム・サブビューローの設立をめざして指名された5名とともに活動を開始した。その際リュトヘルスが使った偽名は“G.L. Trotter”であり、それは“Globetrotter”〔世界を旅する人〕に由来し、彼のそれまでのインタナショナルな活動歴にふさわしいものであった。

サブビューローのメンバー全員による最初の会議が、1919年11月22日にアムステルダムで開かれた。リュトヘルス（途中から妻バルタ）の手書きによる10項目から成る議事日程および議事録が残されているが⁽⁶⁴⁾、この会議でサブビューローの活動開始の取り決め等がなされた。

アムステルダム・サブビューロー創設の国外へ向けての告知は、1920年1月10日付で独語、英語、仏語各版においてロラント・ホルストの名で次のようになされた⁽⁶⁵⁾。

モスクワの第3インタナショナル執行委員会は、若干のオランダ人同志にア

ムステルダムの臨時ビューローを形成することを指図した。その任務は以下のとおりである。1) 共産主義インタナショナルを基礎にした統一を達成するために、共産主義の理念を西欧およびアメリカの労働運動-大衆の下へ普及させること；2) 月2回、仏・英・独語の通報誌 (Mitteilungsblatt) を公刊し、その他に、さまざまな国の運動に関する通信部 (Nachrichtendienst) を組織することをもくろむこと；3) 文書館を準備し、大戦開始以来現れた共産主義文献を集めること；4) 西欧のために、ドイツに設立された [西欧] 書記局と規則的な連絡を取っており、書記局とビューローは、加盟諸党・グループの行動を調整し、決定的なビューローを任命するために不可欠な権威を得るところの国際的な共産主義大会が開催されるまで、共同して1回ないしそれ以上の国際会議を組織するであろう、と。

その最後の任務が大仕事で、かつトラブルのもととなるのだが、それおよびその時の対抗組織であった西欧書記局との関係を節を改めてみていく。

2) 西欧書記局との対立

1919年11月24-26日、西欧書記局が主催した国際会議である秘密会議がフランクフルト・アム・マインでもたれた。その会議議事録が作成されたかは不明だが、以下の紹介は、ふた月後にイギリス労働者社会主義連盟機関誌に掲載された参加者シルヴィア・パンクハースト (Sylvia Pankhurst) による報告にもとづいている⁽⁶⁶⁾。

まず奇異なのは、開催日を12月とだけしており、それは単なる誤記か、あるいは偽装かはわからないが、開催地も明らかにされなかった。公式に参加したのは、ロシア共産党 [ライヒ]、ポーランド共産党 [プロニスキ]、KPD [ツェトキン (Clara Zetkin)]、オーストリア共産党 [フランク (Karl Frank; 西欧書記局メンバーとなる)]、ルーマニア社会党 [マルク (Valeriu Marcu)]、イギリス労働者社会主義連盟 [パンクハースト] だけであり、「予備的で非公式な」会議の域をでなかった⁽⁶⁷⁾。しかも、アムステルダム・サブビューローは出席できなかったのだが、それは招集電報がなぜか6日遅く届いたからであった⁽⁶⁸⁾。

なお、ライヒののちの証言によると、この会議で西欧書記局のメンバーの任命はなされず、それ以前に彼がラデクと一致協力して選んだ構成員が引き継がれた⁽⁶⁹⁾。ここからも会議の正当性は弱い。

西欧書記局が第3インタナショナルの次の会議のための準備をすることになり、討議すべき項目が以下のように決定された。1) それらの国々からの代表による各国現況報告、2) 国際情勢、3) 労働階級の革命的闘争において追求されるべき戦術、4) 組織 [化]。続いて、この予備会議で代表に求められた各国（ロシア、ポーランド、オーストリア、ルーマニア）の情況報告が続く。

同国際会議についてライヒは、1919年12月4日にリュトヘルスへ以下のように報告した⁽⁷⁰⁾。会議は不完全にしか代表派遣されず、議事日程も限定された。そこで、翌年1月に非合法の大会〔「大会」は誇張〕を西欧で招集するという執行部の提案が採択され、拡大書記局がオランダと連絡を取って大会準備を引き受けることになった。そして暫定的な議事日程は、諸報告、国際情勢、議会主義、労働組合運動、組織に関する事項、となった。

その報告を受けたリュトヘルスは、それを1919年12月10日にアムステルダム・サブビューローの全員へ伝えた⁽⁷¹⁾。暫定的な議事日程の中でリュトヘルスがとくに問題にしたのは、ロシアの問題への行動がまったく欠けていたことである（サブビューロー主催の翌年2月の国際会議では取り上げられる）。

それはともかくとして、リュトヘルスの判断によると、自分たちにより詳しい考えやテーゼが期待されているとのことであり、来たる土曜の晩〔12月13日〕にアメルスフォールのリュトヘルス宅でその国際会議のためのプログラムを話し合うことを提案することになり、病氣療養中の彼に代わって本文書は各メンバー宛に妻バルタの代筆で送られ、ファン・ラフェスティン宛のをみると、本文のあとに8項目から成るリュトヘルスによる国際情勢に関するテーゼ草案が続いている⁽⁷²⁾。実際に、国際会議のためのテーゼが注釈等とともに12月22日にベルリンへ送られたとのことだが⁽⁷³⁾、のちに機関紙『プレティン』に掲載されたその「国際会議のための提案とテーゼ」をみると⁽⁷⁴⁾、それは（ここでは詳述しないが）よく準備されたものであったし、その上、議会主義、労働組合主

義、国有化についての各テーゼ類は『共産主義インタナショナル』ベルリン版に「オランダからの提案」としてまとめられてそのまま再録された⁽⁷⁵⁾。

同様の報告をリュトヘルスは、1919年12月26日にノルウェー労働党書記トランメル（M. Tranmæl）へもしており、新たな記述だけを取り上げると、彼らは我々のビューローとの共同を求めてきて、それに対して我々は共同を約束し、さまざまなテーマに関するある一定の議題を練り上げている。が、そのような国際会議を準備するために1月はあまりに早い日付であろう。それゆえ我々は1月会議を予備的と考え、のちに第2回目の会議を組織するつもりであり、云々と。ここに、アムステルダム・サブビューローによる国際会議開催の計画が芽生えている⁽⁷⁶⁾。

そのアムステルダム・サブビューロー主催の国際会議は、1920年2月3日に開会し、2月8日に中断することになる。その紹介は、本稿のテーマに関わる範囲にとどめる⁽⁷⁷⁾。

第4会合（2月5日）で「一国際ビューローの組織化」の討議を始めるにあたって、リュトヘルスが発言した。「一国際ビューローを設立することは必要である、モスクワはあまりに孤立しすぎているので。モスクワの同志たちは、オランダがそのために最も適した場所だと考えているが、しかし来たる大会がそれを明確に決定しなければならない」と。そこには、ロラント-ホルストの説明を借りれば、西欧書記局代表の欠席への配慮があったろう⁽⁷⁸⁾。しかし来たる大会を待たず、次のように決議がなされた。「1）ビューローは「共産主義インタナショナル国際サブビューロー」の名を負い、モスクワと協力して行動するだろう。／2）あらゆる国は1票をもつだろう。もしも一つの国が1名以上の代表を送るならば、その投票は彼らの中で平等に分けられるだろう」⁽⁷⁹⁾。そのことも、またロラント-ホルストに言わせると、「プロパガンダおよび西欧・両アメリカの共産主義グループとのより密接な接触に入るために」そうすべきであった、と⁽⁸⁰⁾。

続く第9会合（2月8日）では、「ビューローの執行部が同志リュトヘルスおよびロラント-ホルスト、またオランダ共産党の代表によって形成される」こと

が承認された。そして上記の国際ビューローの中身がより細かく規定されたあと、以下が決定された。「アメリカ共産党は南北アメリカのサブビューローの形成のため、および……汎アメリカ会議の組織のための方策を講じる権限を委任される。このビューローはその所在地のためにたぶんメキシコを選ぶだろう」。続いて、西欧書記局については以下が決定された。「ベルリンの西欧書記局は、ドイツ、以前オーストリア-ハンガリー君主国を構成していた諸国、バルカン諸国、ポーランドの代表から成る中欧のための一書記局として買って出ることが求められる」。その中欧書記局は「アムステルダム・サブビューローの下部（a subdivision; 仏語版では、une section）を形成する」。

さらに、上記のアメリカン・ビューロー形成に関して、（アメリカ共産党国際書記として「党の国際的諸関係において党を代表する権限を与えられて」⁽⁸¹⁾自らコミンテルン第2回大会出席のため訪露することになり、途中アムステルダム・サブビューローを訪れていた）フレイナが議案を提出し、それが採択された。その中でビューローが果たすであろう機能が次のように規定された。1）南北アメリカ大陸でのコミンテルンの全般的活動の指導；2）南北アメリカの共産主義諸組織の統一およびコミンテルンの来たる大会へのそれら代表の確保；3）メキシコ干渉のような南北アメリカのプロレタリアートの利害に直ちに関係する問題に関する声明の発行；4）ヨーロッパ・ビューローおよびロシアとの関係の確立；5）「日本および極東における活動およびそれらとの連絡のために一日本人同志の協力を確保すること」。そして最後に、アメリカ両大陸の事柄に当てられ、インタナショナルな全般的な事柄の要約が加わったブレティンの刊行が掲げられた⁽⁸²⁾。

第5項目の「一日本人同志」とは、明らかに片山潜をさしており、そのことは同会議にイギリスの職場世話役および労働者委員会（Shop Stewards and Workers Committees）から出席したマーフィ（J.T. Murphy）が本国同志（A. McManus）へ宛てた2月15日付長文書簡で確認される⁽⁸³⁾。この延長線上に片山のパンアメリカン・エイジェンシー議長への指名がなされることになる（後篇へ続く）。

同会議でもっとも波紋をなげかけたのは、国際サブビューローおよびその執行委員会を規定し、中欧および南北アメリカのために2つの補助ビューローを組織する決議を採択したことである。そこでは西欧書記局を中欧の書記局と限定し、しかもアムステルダム・サブビューローに従属させるとの考えまでもが打ち出されていた。

このような決定にまで至った問題は、直ちに西欧書記局との間の紛糾の種となる。ラジッチとドラチコヴィチによれば、この決定はポリシェヴィキの組織的概念のまったく無視を反映しており、当然西欧書記局によって反対された、とある⁽⁸⁴⁾。けれども繰り返すように、最初に与えられた上述の任務、その後のИККИとの不十分な接触・通信（後述）からすれば、そのような「越権」はありえることであった。ハルスが解釈したように、参加者は会議で取り決めた野心的な計画から自らを西洋におけるコミンテルン運動をリードする者とみ、アムステルダム・サブビューローを未来の革命的機関の一つとみなしまでもした⁽⁸⁵⁾。その急進化の是非の問題よりもむしろここで重視したいのは、そのような在外ビューローは中央集権的な「ポリシェヴィキの組織的概念」を前提として運営されようとしたのでは決してなく、多分に自律的要素をもった過渡的組織であったことである。

官憲の監視下であることが発覚して国際会議を急遽休会にしたあと遅れて到着したドイツ代表ツェトキンらと、リュトヘルス、ボロジン(М.М. Бородин [М. М. Грузенберг]；後篇参照)、マーフィらはアメルスフォールのリュトヘルス宅で会議をもった。このことに関するオランダ側の公の報告は少なく、ロラント-ホルストによる説明は以下のように短い。すなわち、合意には至らなかったが、以下が決定された。1) 書記局とビューローは3カ月存続するだろう、それぞれが宣伝活動をし、紛争回避に努めながら；2) 3カ月以内に、もう一つの国際会議が開催され、それがより明確な国際ビューローを設けるために必要な権威をもつことが望まれる⁽⁸⁶⁾。

他方、ドイツ側ではツェトキンが帰国直後に二つの報告をしている。一つは、ツェトキンが執筆し、J[ames]. G[ordon]. すなわちライヒがИККИへ送付し

た1920年2月20日付「アムステルダムにおける会議についての報告」である⁽⁸⁷⁾。それによると、国際会議は不十分な準備の部分的会議に限定され、狭く限られた価値しかもっておらず(例えば、会議参加者は偶然の産物にすぎない)、いかなる点でも正当なものとして認められない。アムステルダムの執行部は、自らが国際的行動の指導・監督にとって決定的であるはずであるとみなし、さらにウェインコープは、ドイツは全般的に革命のさらなる展開にとって決定的ではないとの把握までも示したが、それは西欧書記局の受け容れるところではない。実際の合意点は、ツェトキンらが諸ビューローと指導についてのアムステルダム国際会議での決議を暫定措置と解し、新しい全員による国際会議が可能な限りすぐに開催され、問題を最終的に調整すべきことにオランダ人たちは同意した、ということである。

もう一つは、1920年2月25-26日のKPD第3回大会での報告「国際情勢とアムステルダムにおける国際会議の報告」である⁽⁸⁸⁾。それは上記報告と重なる部分もあるが、ヨリ包括的に整理されて国際会議開催前夜からの経緯から語られている。すなわち、西欧書記局は1920年1月後半に国際会議開催をめざし、そのため「プロレタリア独裁のための闘争における共産主義インタナショナルの戦術についてのテーゼ（草案）」が仕上げられ、[各国各地へ]送られた⁽⁸⁹⁾。しかし、国際交流の妨害のゆえに会議は1月には開催できず、二、三週間程度延期されねばならなかった。そのような時突然1920年1月31日に[アムステルダム・サブビューローから]イギリス、アメリカからの同志がアムステルダムにいたので、2月3日に会議を開かねばならないとの通知を受け取った[この説明で事は済まされるものではない（下記）]。

アムステルダム・サブビューロー批判が続く。[国際会議が官憲に察知され、続くアメルスフォルトでの会議もそうであったように]あまりに実践的に無経験すぎる。オランダ同志たちは、自らの国際会議を大戦勃発以来開催された「最良の国際会議」であったと主張するが⁽⁹⁰⁾、それほど不十分に、それほど軽率に準備され実施された会議はない。さらに、オランダは世界革命にとっていかなる決定的影響力を与えるほどの意義ももたないだろう、と。ここにツェトキ

んらの本音が吐露される。彼女は続けて、オランダは一通過国（Trasitland）にすぎないだろう、逆にドイツはいまや西欧における革命の心臓部である、とまで言い切る。最後に、双方の合意に達した新たな国際会議の開催は5月に予定していることが語られた。

上記説明への反論となるロラント・ホルストラの説明を取り上げると、1月半ばにアメリカとイギリスからの代表がオランダに到着し、ドイツからいかなる通信も来なかったため、これらの同志を利用して会議開催を決定した。そして急使がドイツに派遣され、KPD 反対派の1代表だけが開会日に到着し、他のドイツ代表は（来ようと思えば二日で来れるにもかかわらず）1週間後に来た、と⁽⁹¹⁾。

アムステルダム・サブビューローが先を越すように見られかねない行動に出た背景としては、既述のようにリュトヘルスへの全権委任があった。それは以下のИККИ決定でも傍証できる。すなわち、1919年10月25日ИККИビューロー会議において、ドイツの同志ジェームズのもとへ急使を派遣する議題に関して決定されたのが、オランダでコミンテルンの国際会議を招集するИККИの決定をKPDに通知し、自らの代表をそれへ派遣することを提案することであった⁽⁹²⁾。

それよりも問題は、むしろ西欧書記局の側にヨリあったと私はみる。リュトヘルスは（西欧書記局経由でモスクワから一報告を受け取った〔後述〕）1920年5月9日までの半年の間、同局からいかなる報告も得られなかった⁽⁹³⁾。そこには物理的な困難だけでなく、西欧書記局が意識的にアムステルダムとの連絡を断っていた可能性がある（次節参照）。

さらに、西欧書記局が自らの1月会議の招集を（すでに1月開催とはなりえない）1月31日にコミンテルン第2回世界大会の非公式の招集と同時に行った際に同封したJ.G.の報告によると、アムステルダムの国際会議開催の通知を受けた書記局は、この事態に直面して目下着手した自分たちの会議招集を当面見合わせ、間近に迫っているアムステルダム国際会議への参加を責務だとみなした（ただし、それはあくまで5月後半に再招集するつもり自分たちの全体的

な国際会議の予備的な国際集会にすぎないとみなした)⁽⁹⁴⁾。にもかかわらず、なぜ1週間かかったかということ、それはKPD内で会議参加をめぐる議論が長引いたからとのことである⁽⁹⁵⁾。

ここにアムステルダム国際会議への消極的ないし非協力的態度が垣間見られる。その一方で、上記のようにツェトキンは自分たちの西欧での革命の中心意識を隠そうとはしていない。ドイツ革命が遠ざかりつつあり、KPDが非合法下に追いやられている現状にもかかわらずである。

すでにアムステルダム・サブビューローと西欧書記局ないしKPDとの対立の問題に入っている。実際、1920年5月に再度国際会議を開くことで問題先送りをした面は否めず、両陣営の対立は修復不可能に近かった。

財政および組織的争いとは別に、政治的領域においてもまた、アムステルダム・サブビューローはベルリンを正面攻撃した。争点は議会主義と労働組合に関する態度であり、両方ともドイツの党内闘争において当時重要な役割を果たしており、1920年4月4-5日にKPDから離脱した左派はドイツ共産主義労働者党（KAPD）を創設した。この問題は思想・政治的立場の分析を必要とするので本稿では立ち入らないが、アムステルダム・サブビューローが下した結論だけを記しておけば、来たる国際大会がこの問題について最終的な決定を下すまでは、KAPDはコミンテルンのメンバーとみなされるべきである、であった⁽⁹⁶⁾。

そもそもコミンテルン創立大会は議会選挙参加に拒絶的であったし、ИККИ議長ジノヴィエフの名による1919年9月1日付表明「議会主義とソヴェトのための闘争（回状）」も、ソヴェト権力と議会主義とは両立しないと的前提のもとに議会主義の利用を極めて限定的に認めるにすぎなかった。アムステルダムでの翌年2月の国際会議でパネクークによって準備されたが、官憲の介入で取り扱われなかった議会主義に関する議案は、基本的にはその回状にもとづいていた⁽⁹⁷⁾。

この問題が紛糾した主因は、後述するようにИККИ自体が方針転換したことである。その方針転換の推進役を果たしたのが帰国したラデクであったのであ

り、ライヒの立場はほとんどいつもラデクのそれと一致していた。「私[ライヒ]は絶えず彼[ラデク]に相談し、私の政治路線は主要な点については彼のそれと一致した」⁽⁹⁸⁾。

3) スカンディナヴィア・ビューローからの支援

アムステルダム・サブビューローは、1920年に入ってロシアとの信頼できる直接的な連絡がとれず、その結果、ベルリンとモスクワとの間の連絡に頼らざるをえなくなる。しかし、ベルリンとモスクワの間で規則的な報告が行き交っていたにもかかわらず、リュトヘルスはライヒを経由して送った一連のペールジン宛書簡への返事をまったく受け取れなかった⁽⁹⁹⁾。

アムステルダムの苦境は、外務人民委員部参事会メンバーとして北欧（この時コペンハーゲン）に駐在していたリトヴィノフのチチャーリン宛1919年12月14日付電報でも、次のように言及された⁽¹⁰⁰⁾。リュトヘルスはなぜかまだスカンディナヴィアの人たちと接触していない。オランダに形成された書記局が、ベルリンの人たちの手にある金の分配の集中管理へ向けて処置を講じていることは非常に重要だ、と。

1920年2月、リュトヘルスはモスクワとのもう一つの通信経路をどうにか見つけようと試みた。ストックホルムでスカンディナヴィア・ビューローを指揮し、仲介者として活動していたストレムが協力することになった。ストレムはリュトヘルスに、届いた書簡が9日以内にモスクワへ配達されるように手配できる、と保証した(下記参照)。リュトヘルスの方は、書簡が開封されるのをおそれて、重要情報を伝えるために数字暗号通信法を用いた。さらに、ストレムは窮状のアムステルダム・サブビューローへいくらかの財政的支援を行うことができ、1920年3月初めには8千ギルダールがアムステルダムへ送られた⁽¹⁰¹⁾。

ストレムのリュトヘルス宛1920年4月6日付書簡[暗号数字が解読されている写し]には、こうある⁽¹⁰²⁾。1) 我々は2カ月間[つまり、2-3月]そこ[ベルリン]からいかなる報告も得ておらず、ベルリンの西欧書記局との接触をまったく失っている；2) ……；3) 金の問題もまた我々にとって非常に困難であ

るが、我々はあなたがたに最初の5万クローナの価値をもったものを送る。新しい送付が、最初のもの到着の報告がありしだい続く；4）……；5）無線通信士である同志がいるか？ 希望するなら、我々はあなたがたにヨリ短時間で無線受信機を送ることができるであろう；6）我々はいまモスクワと週3回直接接触している。どうかロシアへの印刷物や書簡を我々に送ってもらいたい。すべては9日でモスクワに着く。

リュトヘルスはさらに資金を仰ぎ、5月上旬4つの宝石を受け取ったが、それで（5月12日時点で4千ギルダーに達していた）負債をほとんど弁済できず、さらに大きな1個を緊急に頼んだ。その時すでにサブビューローは、ИККИより解散通知を受け（後述）、技術的な仕事で我慢するしかなかった。ストレムは弁済資金の提供を申し出なかった⁽¹⁰³⁾。

このように、アムステルダムとストックホルム（ないしクリスチアニア）との密使による接触・通信は一時ながら保たれた。カンによれば、リュトヘルスとスカンディナヴィア人との通信の数字暗号部分は今日解読できていないが、それらは圧倒的に金の問題、ダイヤモンドの現金化や関連のものであるだろう、という⁽¹⁰⁴⁾。

その一方で、ベルリンとアムステルダムないしストックホルムとの接触・通信は途絶えたままであった。そのことに関して、既述の1920年7月16日付「活動報告」（注20）の一部を紹介すると、スカンディナヴィア委員会は西欧書記局と何回も接触を試みたが、しかし成功しなかった。B-y[プロニスカか？]がストックホルムを訪れた際、彼は同委員会からの手紙を受け取ったが、しかしそれに答えるいかなる興味も抱かなかつたと表明した、とある。かかる姿勢が西欧書記局側にあったとするならば、その接触・通信困難の原因の中にも書記局自身の消極性ないし恣意性が入り込んでいた可能性が浮かび上がる。

ストレムは共産主義青年インタナショナルのベルリン本部のミュンツェンベルクを介して西欧書記局との接触を試み、1920年5月上旬にそれに成功した。西欧書記局に伝達されたストレムの書簡（写し）によると、「我々はJ[ames]から[1920年]1月以来いかなる言葉も聞かないし、またいかなる郵便も受け

取っていない。……またオランダから我々が言われたのは、彼らはいかなる返答もベルリンから受け取っていない。……ベルリンがロシアや他の国々との我々のより良い関係を利用しようとしなければ、我々はこのことを嘆くだけであろう」⁽¹⁰⁵⁾。

末尾に関して、この時よりひと月もたないであろう時点で ИККИ が西欧書記局へスカンディナヴィア・ビューローを通じて継続文献をいま送っているとラデクの手紙を読むと⁽¹⁰⁶⁾、ますます西欧書記局のその他の在外ビューローとの没交渉の中に通っていた消極性という意志が浮かび上がる。

4) アムステルダム・サブビューローの解散決定

1919年12月にドイツの監獄から釈放され、翌1920年1月に戻ったラデクは、直ちに ИККИ に出席して重要な報告をし（下記）、3月には同書記となり⁽¹⁰⁷⁾、ИККИ においてジノヴィエフに次ぐナンバー2となる。

それに先だつ1919年12月1日にはまだ、ИККИ ビューロー会議の第4議題「ドイツとフランスの共産党における分裂について」に関して、以下が決定されていた。「同志リュトヘルスへ、ドイツへ赴き第3インタナショナルの正式な仲裁を〔分裂の〕双方の側に提案することを委任する」⁽¹⁰⁸⁾。

この時点で ИККИ の全権リュトヘルスへの期待はなお大きい（当のリュトヘルスは健康上の理由でそれどころではなかったのだが）。このような期待は、後述するパンアメリカン・エイジェンシー議長片山にもかけられる。けれども、ひとたび ИККИ 方針転換が決定されるや、彼らへは容赦のない措置が ИККИ によって取られることになる。

その第一歩は、1920年1月30日の ИККИ ビューロー会議で踏み出された。第1議題が「ドイツにおける事業の状態に関するラデクの報告」であり、報告についての討論は次の会議まで延期することになった、と議事録にある⁽¹⁰⁹⁾。報告が長かったか、内容が重大であったからか、それとも両方であったかであろう。

この時期、詳述はしないが、ドイツ独立社会民主党（USPD）が1919年11月30日～12月6日のライブティヒ臨時党大会において、第2インタナショナルへ

の不参加および行動力のあるプロレタリア・インタナショナルの創設についてコミンテルンおよびその他の社会主義諸党と協議する用意があることを決議し、その協議を呼びかけられたロシア共産党（ボ）中央委員会およびИККИは、1920年1月20日にそれぞれ政治局会議およびビューロー会議を開催した⁽¹¹⁰⁾。そこでの決定にもとづいて作成された回答「ドイツの全労働者へ、ドイツ共産党中央委員会および独立社会民主党中央委員会へ」⁽¹¹¹⁾は、2月5日にИККИ議長ジノヴィエフの名で発せられた。その回答は、「プロレタリア大衆の高まりゆく革命的認識が独立社会民主党的指導者の隊列を清掃し、ドイツ共産党との合同の方向に党をおしすすめ、結局は同党の最良の分子を共産主義インタナショナルの共通の旗のもとに組織するであろうという確信を表明」し、「話し合いのために独立社会民主党的代表団を招請する」こととなった。それは方針転換であり、KPD内の左翼反対（急進）派よりはUSPD内の左派およびランク・アンド・ファイルに期待をかけるものであり、そして1年後にいわゆる労働者統一戦線を採用する道を拓くものとなる。

次回2月1日のИККИビューロー会議をみていくと、ジノヴィエフ、プハーリン、ベールジン、コベツキー、ラデク、ラコフスキら15名というこの時期最大の出席者を迎え、第2議題「本年1月30日会議でなされた同志ラデクの報告に対する討論」において、討論が終わらなかったために決議は行われなかった、とある⁽¹¹²⁾。激論が戦わされたであろうが、上述の方針転換はここでもほぼ固まった。というのは、続く第6議題「ドイツ共産党の二つの潮流の間の仲裁およびそれらの統一のために以前リウトヘルスに与えた全権委任について」において、それが取り消されることが決定されたからである。

翌2月2日の12名が参加した同会議において、在外ビューローに関する重要な変更が下された⁽¹¹³⁾。その詳細をみていくと、まず主要な第2議題は「ИККИ在外ビューローの組織化について。聞かされた同志リウトヘルスとアブラモヴィチの〔両〕書簡および同志ラデクの報告」であり、以下が決定された。

1) ソフィアにバルカン・ビューローを設立する。セルビアとルーマニアの党にこのビューローに自らの代表を派遣するよう提案する。

2) スtockホルムのスカンディナヴィア・ビューローは、同志ヘグルント、ストレム、チルプムから編成する。このビューローはスカンディナヴィア半島だけを取り扱い、自らの活動について毎月の報告を提出しなければならない。

3) オランダ・ビューローはオランダ、イギリス、アメリカを担当しなければならない。オランダ・ビューローに、もっぱらИККИの仕事に一身をささげなければならない二、三のメンバーを自らのスタッフから分離することを強制する。アムステルダムに第3インタナショナルの文書館を形成する必要性を確認する。オランダ・ビューローへИККИによって承認されたテーゼを通知し、オランダ・ビューローによって提出されたテーゼへの詳細な批判を与える。

4) ウィーン・ビューローは同じ構成で、現在と同じような全権をもって残す。

5) ベルリンの西欧書記局はドイツ、フランス、ベルギー、スイス、イタリア、ポーランドを担当しなければならない。書記局の構成は列挙された国々の諸党会議によって定まる。小ビューローに西欧書記局のための指令の作成を委任する。

続く第3議題「責任ある指導員の派遣について」では、「ИККИが自らの在外ビューローへ活動を指令し方向づけるために出向させるところの二、三の責任ある党活動家をИККИの指揮の下に出向させることをロシア共産党中央委員会に依頼する」ことが決定された。

このようにオランダ・ビューローの管轄範囲が極端に狭められ、モスクワのコントロールの強化の兆しが窺える中で、かつてリュトヘルスに与えられた全権委任はまったく言及されることなく撤回された。しかも、この決定自体が、通信困難かそれとも意図してかは断定できないが、決してすぐにはリュトヘルスに届かなかった(後述)。その一方で、ИККИ 予算委員会の文書によれば、1920年2月20日にライヒへ宝石類27万5千ルーブリ相当が新たに提供されている⁽¹¹⁴⁾。それはこの決定を踏まえてのことであろう。

初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ（上）

ついに1920年4月25日の「そこにはまたスウェーデンとノルウェーの左翼の党の代表〔グリムルトとフリース（J. Friis）〕が参加した」ИККИ会議で、アムステルダム・サブビューローの全権委任を「セクト的政策」ゆえに取り上げることが決定された⁽¹¹⁵⁾。

同日、その決定をИККИ書記ラデクは認証謄本の形でストレムへ送り、それは5月12日にストックホルムへ届き、その日のうちにリュトヘルスへ送られ、5月15日にアムステルダムに届いた⁽¹¹⁶⁾。その写しによって全訳しておく。

オランダ・ビューローはいくつかの重要問題（労働組合問題、議会主義）で第3共産主義インタナショナル執行部の立場に反する立場をとった。オランダ・ビューローは、アムステルダムで国際会議を招集する前に自らの対立する態度について執行部へ知らせなかった。この理由で執行部は、オランダ・ビューローの全権委任が失効されたと表明し、この全権委任を撤回する。

執行部はそれについて詳細な書簡をオランダの同志たちへ送ることを小ビューローに委任する。オランダ・ビューローの機能は西欧書記局に移され、ストックホルムのスカンディナヴィア・ビューローは決算報告書および現金・貴重品の残りを受け取ることを委任される。

共産主義インタナショナル執行部を代表して、書記／K. ラデク／ペトログラト 1920年4月25日⁽¹¹⁷⁾

その決定通知が届くまでに3週間を要したことになるのだが、それより早くアムステルダム・サブビューローに届いたのは、5月4日の無線電信（Radio-Rosta）による第3インタナショナルの決定であった⁽¹¹⁸⁾。あれほど通信に支障をきたしていたのはほんとうだろうか、との疑問がわく。ともかく、それを紹介する。

ИККИは、ノルウェーおよびスウェーデンの左派諸党の代表が参加した会議において、コミンテルンの係争のいくつかの問題について意見を述べあい、ИККИはブハーリン、ラデクおよびジノヴィエフにこれらの問題についての覚書とテーゼの作成を委任した。そしてアムステルダム・ビューローがすべての問題でИККИに反対を唱えているゆえに、満場一致で同ビューローの全権委任

を取り消すことが決定された。その機能は西欧書記局に引き継がれる。さらに、第3インタナショナルに加盟する諸党の部分的な会議が開かれるならば、その会議の決定は予備的性格しかもちえず、ИККИによって招集された国際大会のみが、最終的決定を下すことができるであろう。ИККИは書記としてラデクを選任したことが、最後に知らされた。

それはまさかという驚きをもって迎えられた。リュトヘルスはすぐにラデクによる悪しき影響を疑った⁽¹¹⁹⁾。5月15日にはリュトヘルスはブハーリンに、「我々は、カール [ラデク] の政策がとりわけ、あなたによってもまた承認されたことを決して信じない」と書いた⁽¹²⁰⁾。しかし、その前兆はすでに1920年1-3月時点であった。すなわち、上記リュトヘルスのウェインコープ宛1月28日付書簡（注91）の中で、西欧書記局の「テーゼ」は「ラデクの小冊子にまったくもとづいている」と批判され、各章ごとに厳しいコメントが付され、さらにラデクの「小冊子」⁽¹²¹⁾は私見では、ことによるとロシアで多数の支持を見いだすかもしれない新しい方向性を与えており、憂慮すべきだ、とまで記されていた。またトロッター [=リュトヘルス] のヴィンター [=ベールジン] 宛3月9日付書簡では、リュトヘルスが発った5カ月近く前のロシアの気分は、少なくともラデク、プロニスキ、アブラモヴィチら [の論調] から判断するに、大いに变化したように思われる、とあった⁽¹²²⁾。

1920年5月10日、ロラント-ホルスト、リュトヘルス、ウェインコープ署名の表明 (Erklärung) が発された⁽¹²³⁾。それは5月4日の電信にもとづいて書かれたものであり、ИККИへの反論に向かうのではなく、こちら側の問題に焦点を絞った表明だった。すなわち、1) 西欧書記局の誠実でなく同志的でない策略などが共同を極端に困難にしている；2) さまざまな国・グループにおける日和見主義的政策が不同意を引き起こし、そこにはラデクの重大な影響がある。「我々はモスクワの人々が一方的な報告 [草稿段階ではここに「とりわけラデクの」があった] に従って西欧書記局に正式な承認を与えるのを決めたことを残念だとみなす」。

1920年5月12日にリュトヘルスがベールジンに宛てた書簡には⁽¹²⁴⁾、「いま5

月9日にベルリン経由で M[oskau]. から一つの報告が初めて我々のもとへ届いている」とあり、続く文章をみると、すべてを正確に解読できないとしながらも、アムステルダム・サブビューローの権限がすでに極端に狭められていたことをリュトヘルスらは初めて知らされたことになる。しかし、日付も署名もない別紙「1920年5月9日にオランダで受け取られた指示」をみると、それはなんと本稿最初に紹介したジノヴィエフの「構想」と基本的に変わらないものであり、サブビューローの権限の及ぶ範囲は「オランダ、イギリス、アメリカ、オーストラリア、その他」であった⁽¹²⁵⁾。微妙かつ重要な時期にもかかわらず、なぜサブビューロー批判を含んだ上記2月2日のИККИビューロー会議決定の方が伝えられなかったのであろうか。

リュトヘルスの方は同書簡において、西欧書記局批判をさらに徹底して繰り返した。すなわち、西欧書記局は、我々の意見によれば、西欧における統一や活動能力にとってますます障害以上であることが証明されている。実際に国際的な構成をもった一機関をベルリンに創造することが可能ならば、我々はそれを当然認めることができるだろうが、しかし、我々はその可能性はわずかだとみなし、西欧書記局の前史がその好機を予め台無しにすることをおそれる、と。また上記サブビューローの残り資金の移管指示に対して、それどころではなく我々は今4千ギルダーの負債がある、とバールジンへ通知した⁽¹²⁶⁾。

続く5月14日のИККИ宛書簡では、リュトヘルスは次のように具体的にИККИへ反論した⁽¹²⁷⁾。1) 議会主義の問題において、アムステルダム・ビューローは私の出発の際提示された [ジノヴィエフの] 回状にまったく自らをもとづかせてきた。ウェインコープとファン・ラフェステインが下院議員である事実が、我々の立場を裏づけている。2) 労働組合に関して、ビューローはある状況下では反動的組合内での革命的闘争に反対しないが、しかしその間に革命的組合がまた現れたことを指摘し、(1920年4月に革命的 [赤色] 国際労働組合を形成するためのロシア労働組合の呼びかけによって再び証明されたように) モスクワの方針はそれら [革命的組合] に優先権を与えうると主張した。

本節を終えるにあたって、解散決定についてのスカンディナヴィア・ビュー

ローの反応を付記しておく。

その解散決定は、ストックホルム〔・ビューロー〕の7月報告の中で無視され、彼らによって次のように表明された。「オランダ・ビューローと我々は良い連絡を取ってきている」。このことによって間接的に、オランダ〔・サブビューロー〕に対するモスクワの取り扱い方およびベルリンの西欧書記局の優遇が非難された⁽¹²⁸⁾。そのことはまた、ストレムのリュトヘルス宛1920年5月9日付書簡で次のように表現された⁽¹²⁹⁾。「西欧書記局の活動についての我々の経験は、残念ながらよくない。我々は執行部がそのような措置を講じたことを残念に思うが、しかしすべてはなおよく整えられていると思う」。

スカンディナヴィア・ビューローは（ここでは詳述しないが）6月初めノルウェー〔クリスチアニア〕で計画されている国際会議へのアムステルダム・サブビューローの出席に積極的であり続けた。けれども、その国際会議はコミンテルン第2回大会招集によって実現困難となっていく。

5) アムステルダム・サブビューローの評価

本稿が取り扱った範囲におおよそ限定してだが、アムステルダム・サブビューローに関するこれまでの評価を批判的にみていき、暫定的ながら私自身による評価を試みる。

まず、ИККИによる評価を代表させて、既述のジノヴィエフによるコミンテルン第2回大会へのИККИ報告をみると、こうある。オランダ・ビューローにИККИが与えた権限は、可能ならば会議を招集し、いくらかの国へ印刷物を配布するために務めるであろう技術的な補助ビューロー（a technical auxiliary bureau）を形成することであった。しかるに、活動のまさに最初からビューローは与えられた権限を越えていた。その例として議会主義、労働組合、KAPDへの態度の問題、そして1920年2月の国際会議は関係国の運動に混乱を招いた。ゆえに選択を迫られ即刻ビューローを解散することにした、と⁽¹³⁰⁾。

ここにはИККИが最初に与えた全権委任が意図的に伏せられており、最初から「技術的な補助ビューロー」であったかのごとく取り扱われている。リュト

ヘルスらが批判した ИККИ の方針転換という自らの問題は不問に付されている。報告の最後でジノヴィエフは、オランダ共産主義者は10年以上の活動後も2千から3千の党員しかもっておらず、ИККИ は共産主義運動をセクト主義的な誤りから守るために解散決定をした⁽¹³¹⁾、とまで言っているが、ここまでくと強弁と言うしかない。

次にスヴァーテックによる評価をみると、こうある。西欧諸国の革命的左派を社会民主主義諸党から組織的に分離させる努力は、コミンテルンのポリシェヴィキ指導者をして ИККИ の多くの「在外ビューロー」（例えばアムステルダム、ベルリン、たぶんブタペシュト、ストックホルムなどにおいても）を機能させることに導いた。しかしながら、ロシアとコミンテルンの外国人エイジェンシーとの間の接触は弱かった。このことがビューロー間の競争、そして全般的には、組織的諸問題における大きな混乱をもたらした。同時に、コミンテルンの組織は未だ非常に不明確であり、なお誕生の段階であった、と⁽¹³²⁾。

在外ビューローが単なる技術的機関にとどまらなかった実情、およびコミンテルンが組織形成期であったというポイントは良く押さえられている。が、当然のことながら、「混乱」の史料的解明は近年のアルヒーフ史料の公開を俟たなければならなかった。

ラジッチとドラチコヴィチによる評価は、こうである。オランダの指導者たちには地下工作の経験がなかった。それに比べて、西欧書記局によって招集された1919年11月の国際会議は、まったく官憲に知られずに済んだ、と⁽¹³³⁾。私見では、そのことは一方で、出席者が少なすぎる問題を生じさせた。非合法活動の習熟度が直接的に運動の成果につながるとは限らない。

またラジッチらは、アブラモヴィチ、リュバルスキー（Н.М. Любарский）⁽¹³⁴⁾、ライヒらコミンテルンの国外派遣密使（emmissaries; 彼らは10月革命前に欧米諸国に住み、主要言語の一つ以上を話せた）の活動についてかなりのページを費やしている。ラジッチらが彼らの活動を重視するのは、モスクワ中心の「上から」のコミンテルン支配の先例をそこに批判的にみようとするからであった。そこには、いわゆる「モスクワの目」と彼らが言われる問題点がある。すなわ

ち、1) 密使の意識は、当該国の共産党指導者よりもコミンテルン執行部の方に強くある；2) 密使は当該国の共産党に直接的な責任をもち、通常党指導者の知りえない報告をモスクワ本部へ頻繁に行っていた⁽¹³⁵⁾。その意味で、彼ら密使の現地での影響力は一時的で、限定的と言うしかない。

ラジッチらは、冷戦下の多くの西欧史家に言えることだが、在外ビューローの中に最初からロシアの中央集権的コントロールをみがちであり、それに従わなかったビューローが解散させられたのは当然であったと決めつける。

しかし、コミンテルン本部の外に向かつての中央集権化が始まるのは、1920年に入って早々干渉戦争の好転に兆しがみえはじめてからであり、アムステルダム・サブビューローの解散決定を皮切りに同年夏、在外ビューローを活動途中で解散させ、ヨリ自分たちの意向が通じやすい個人的なエイジェントに切り替えるところからであった。すなわち、1920年8月6日、ロシア共産党（ボ）中央委員会政治局は第4議題「第3インタナショナル執行委員会在外ビューローに関する問題」で以下の決議を採択した。「すべてのビューローは廃止する。もっぱら技術的な目的のために単独で行う個人的なエイジェントだけを許可する」⁽¹³⁶⁾。

ИККИに関する決定をロシア共産党が先行して行っているところは特徴的だが、その二日後8月8日のИККИ第2回会議で在外ビューローに関する問題が議論され⁽¹³⁷⁾、まずジノヴィエフが次の提案を行った。我々は執行委員会を前に個人的な責任なしに一つのビューローも存在しないようにするための提案、言い換えれば、あらゆるビューローを解散し、すべての事柄を個人的な信用の上に組織する案を提出する、と。これはアムステルダム・サブビューローとベルリンの西欧書記局との対立をとくに念頭においてのものであった。

続いてマーリン（スネーフリート）（H. Maring [H.J.F.M. Sneevliet]）が発言した。私の考えでは、極東と中東においてそのような中心を確立することは不可欠であり、執行委員会がこの提案を受け入れることを希望する、と。それは上海、タシケントなどを念頭においての提案であり、すでに中国、蘭領インド、朝鮮の各代表である劉紹周、マーリン、朴鎮淳が、上海に極東の一ビュー

ローを即刻設立することを1920年7月25日にコミンテルン第2回大会へ提案したのを踏まえてのものであった⁽¹³⁸⁾。

フレイナもまた、アメリカ帝国主義が極東にまで広がっていることを考慮して一アメリカン・ビューローをもつべきだと主張した。彼が言うには、両アメリカでは未だ共産主義運動はなく、ただ革命運動があるだけであり、もちろんモスクワの統制下にてであるがアメリカに固有のビューローがあらねばならず、それはメキシコがふさわしいであろう、と。

このような新たなビューロー創設の提案に対してジノヴィエフは、以下のように総括した。私はヨーロッパにおけるビューローに関する理念の清算後、アメリカに存在しなければならないそのようなものを思う。同種の中心をもつことは不可欠だ。アメリカと極東において状況はなおよりはるかに都合が悪く、困難はより大きい[タシセントとメキシコでのビューローが名指されている]、と。そしてジノヴィエフは、執行委員会に以下を決定することを提案した。執行委員会と並んで政治的任務をもった他のビューローは存在してはいけない。この決定によって西欧ビューローやその他類似のビューローは廃止される、その一方で、小ビューローはさまざまな国において自ら委任された個人を指名し、彼らに彼らの個人的責任の下に一定の任務を与える。小ビューローはさらに急使の勤務の組織化について配慮しなければならない。急使は、1) 文献の配達、2) さまざまな情報の送受、3) 政治的任務の遂行という3つのカテゴリーに分かれる、と。その提案は採択された⁽¹³⁹⁾。けれども、三番目のカテゴリーに「政治的任務の遂行」もあるのだから、なおさらビューローの任務は曖昧化を免れない。

この決定により在外ビューローは姿を消すことになった。その一方で、ヨーロッパのビューローの解散と同時に、アメリカと極東における新たな（任務を限定された）ビューローの設置がここに決められた。フレイナ発言がパンアメリカン・エイジェンシー創立の発端となったと言えようが、同エイジェンシーもそのような「個人的なエイジェント」として位置づけられたのであり、そのことはまた ИККП の一存で容易に解散させられる性格の機関であったことを

意味する（後篇へ続く）。

ИККИ 議長自らによって西欧書記局の解散が通知されたライヒが、それを KPD 中央に伝えたところによれば、「執行委員会 [ИККИ] はそれ以前のビューローの代わりに、特別な政治的任務なしの一群の信頼できる人々 (Vertrauensleute) を就かせるだろう。……ドイツの領域に対して我々は、同志トーマスを唯一の信頼できる人として指名した；同志グラリスキー (Guralski; А.Я. Гуральский) を代理人として」⁽¹⁴⁰⁾。

しかし、あとには「西欧書記局の組織は当分の間存続し、執行委員会の指示に応じて解体される」とのライヒの文が続いていた。果たして「当分の間の存続」が ИККИ の意向だったのであろうか。そうだとすれば、解散決定の有効性が疑問視されるし、あまりにもアムステルダム・サブビューローへの措置と対比的すぎる。ベルリンの唯一のコミンテルン代理人となったライヒは、解散指令にもかかわらず1925年まで西欧書記局を名乗って活動していく⁽¹⁴¹⁾。

在外ビューローの閉鎖に関して、最新のフルマンの研究が以下のように総括するのは肯ける。すなわち、その閉鎖は1920年にコミンテルンにおいて始まった中央集権化の経過の第一歩を印づけた。連合国によるロシア包囲の終結をもって、コミンテルンの在外ビューローのネットワークのための重要な存在理由はもはや適用されなくなった。ますます中央集権化されたコミンテルン機構内では、もはやそれらのための場所はなかった、と⁽¹⁴²⁾。

フルマンは、リュトヘルスに全権委任した1919年秋とは違い1920年に入って状況は好転し、ИККИ の西洋共産主義諸党への方針が急変した、それを通信網の不備も手伝ってアムステルダム・サブビューローが把握して戦術を変更しなかったゆえに ИККИ から解散させられたのは当然だった、と割り切って捉えている。しかし、私が本稿で強調したいのは、最初の在外ビューローがめざした西洋に根ざそうとした運動の可能性であり、その可能性を摘み取るかたちでの中央集権化であったことである。

ラジッチらは、大部分の中・西欧において1920年前半ほとんど同時に同様の左翼共産主義が表面化し、それはたとえ強力でなくとも少なくとも厳格なレー

ニン主義的服従の共産主義よりもより騒々しかったように思える、と捉えている⁽¹⁴³⁾。上述のように、それはいささか対比的すぎ、私の評価の方向性とは異なるのだが、1920年どころかそれ以前から、なぜ国境を越えてそのような左翼勢力が台頭していたのか、ここでアゴスティの把握を借りて試みに論じておく。

ロシア10月革命後直ちに国際共産主義運動を発足させた左翼勢力は、革命的過程の国際的性質に強く力点を置いた。この国際的な次元こそが、社会主義運動の歴史が産み出してきた同質性および一貫性を保証する。革命的過程のこの本質的に国際的なヴィジョンは、等しく重要である二つの起源をもっていた。すなわち、一つは、重要な相違にもかかわらず第2インターナショナルのすべての急進的左派に共通であった帝国主義の分析である。資本主義の国際化に伴い、労働側もまた生産力を社会化する過程にとって障害となってきた国民国家を越えて国際化すること（プロレタリア国際主義）が求められていたことである。もう一つは、ロシア10月革命はヨーロッパの社会革命のプロローグであり、ロシア革命の唯一の保証は先進国革命であるとの確信（「世界革命」論）が共有されていたことである⁽¹⁴⁴⁾。

以上の起源から、すでに私が考察してきたように、第一次世界大戦中反戦社会主義左派において「国際化したボリシェヴィズム」が西欧どころか欧米規模で形成されていったのであり⁽¹⁴⁵⁾、そしてコミンテルン創設前夜の1918年末から1919年春にかけて革命に隣接するロシア西方地域で集中しかつ相互に関連して起こった一連の事件は「一体化した全体」として取り扱われるべきであり、そこには「世界革命」の理念が通底していた⁽¹⁴⁶⁾。さらにコミンテルン創設直後は、一方は勃発したハンガリーおよびバイエルン革命をさらなる飛躍台として、その一方で国内戦と干渉戦争で苦しんでいたソヴェト・ロシアが積極的支援を与えることができない中で、西洋各国各地で左翼急進的思想と行動が展開されていったのは、決して偶然ではない。

しかし、この急進的思想および運動は、当時の反-帝国主義戦争、反-資本主義という社会不満の高まる中での希望的観測を伴ったものであったのであり、アゴスティが指摘しているように、そこでの確信は革命的希望と現実との混同

を誘導し、西洋における潜在的な革命の成熟性を過大に評価し、その一方で同時に、欧米におけるブルジョワ体制の強固さと労働者への日常・伝統の拘束力を過小に評価した。その上、1920年後半、21年へと続く展開が最初の社会主義国家の生き残りの可能性に関してますます自信を強めるにつれて、革命的過程が必然的に国際的過程であるという着想に生命力を与えてきた自由意志的要素は徐々に色あせていく⁽¹⁴⁷⁾。

言うまでもなく本稿が取り扱っている在外ビューローは、革命的過程の国際的次元の揺るがない確信、すなわち「世界革命」が意識されていた時代のことであった。

アムステルダム・サブビューローの評価に戻って、既述のようにИККИによって設立された在外ビューローの中で（少なくとも途中、すなわち1920年2月2日のИККИビューロー会議での再決定までは）もっとも多くの権限を与えられたビューローでそれはあり、その構成メンバーである6名のオランダ左派（トリビュニスト）は当初から指名されたものであり、彼らへの期待は高かった。彼らによる1920年2月の国際会議開催およびそこで採択された決議は直ちにИККИから批判されるのだが、少なくとも開催に至るビューローの任務は「逸脱」とは言いがたい。

その一方で、ベルリンの西欧書記局への重心の移動がИККИによって指示されるのだが、当の書記局にそれに応えられるほどの要件が備わっていたかは、はなはだ疑問である。1920年2月の国際会議のあとベルリンへ移ったボロジンは、3月3日からひと月にわたってKPD、西欧書記局のメンバーなどと会談した内容をその都度「日記」に書き留め、それをアムステルダム・サブビューローへ送っており、その体験を踏まえたおそらくコミンテルン本部宛であろう報告で、次のように記している⁽¹⁴⁸⁾。「実際のところ書記局は一人の人間——ジェームズから成っている。他の人々は書記局の会合に出席するだけで、ほとんど何の実際的な仕事もしていない。ジェームズの意見によれば（私もこれにまったく同意するが）、書記局は思想的な指導者、国際的な評判を得た人に欠けている」

と。

1920年2月の国際会議に出席し、フレイナとともにモスクワ行をめざしてベルリンにやって来ていたマーフィもまた、ジュームズは技術的ビューロー設立のためにドイツへ派遣されてきたとみなしていた⁽¹⁴⁹⁾。そのように本質的に技術的機関の色彩の濃かった西欧書記局が、果たして政治的機関として十分に機能しえただろうか。

その上、コミンテルンからの派遣要員と KPD 党員から成る西欧書記局は、絶えず両者の溝を意識させられた。すなわち、前者にとって重要なのは、モスクワ本部からの指図の実行と本部のジノヴィエフ、ラデクへの報告(時には、KPD 執行部を通してでない「秘密報告」)であった。第一義的にはコミンテルン指導者のために彼らは働いたのであり、そのため KPD 中央に対して距離を保つことに意を用い、党集会にも出席するのは稀だった。まもなく、ここでは詳述しないが、両者の確執は避けられなくなる⁽¹⁵⁰⁾。

さらに、メンバー構成がドイツ語圏の外に広がらなかったこと、また同局の接触・通信の範囲も限られ、「西欧」ではなく「中欧」の範囲にとどまっていたことは、問題であったろう。

アムステルダム・サブビューローの機能の西欧書記局への委譲に関して、アメリカ・イギリスとの関係の委譲および両国の運動への物質的および精神的支援の要望がラデクによってなされたが⁽¹⁵¹⁾、とりわけ密接な関係をサブビューローが築きあげていたアメリカの「委譲」が一片の指令で容易に果たされるはずがあるだろうか。ましてや西欧書記局には、ロシア行をめざして滞独中のフレイナおよびマーフィに対して支援しえなかったか、あるいは支援しようとしなかったかの前歴があった⁽¹⁵²⁾。

最後の接触・通信の問題こそ、アムステルダム・サブビューローにとっては評価点であり、サブビューローが接触・通信した範囲は当時の在外ビューローの中でおそらく最大であったろう。サブビューロー関係の書簡類を分類し、まとめたリストが残されており⁽¹⁵³⁾、それによれば、項目として挙げられている国・地域は以下のとおりである。①スイス、②ИККИ [ソヴェト・ロシア]、③

西欧書記局、ドイツ、④北欧、⑤アメリカ合州国、⑥日本、⑦イギリス、⑧フランス、⑨スペイン、⑩メキシコ／[亡命]インド人、⑪ベルギー、⑫ルクセンブルク、⑬オランダ。

実際、アルヒーフ史料によって私が確認できた通信・接触相手国は、以下である。①ソヴェト・ロシア、②ドイツ、③スウェーデン、④ノルウェー、⑤デンマーク、⑥フィンランド、⑦イギリス、⑧アメリカ合州国、⑨日本、⑩メキシコ、⑪スペイン、⑫フランス、⑬ベルギー、⑭ルクセンブルク、⑮オランダ、⑯スイス、⑰オーストリア、⑱イタリア、⑲南アフリカ、⑳オーストラリア。その他、上記1920年5月10日表明（注123）で挙げられた以下の交流が加わる。㉑ポーランド（オーストリアを通じて）、㉒ブルガリア、㉓蘭領インド。

アムステルダム・サブビューローは英語、独語、仏語、蘭語によるリーフレット類を大半はサブビューローの通信（Communication; Mitteilung）という形で短期間ながら精力的に発行したのだが、私は51点を確認でき、うち37点を上記科研費報告書に再録した⁽¹⁵⁴⁾。それらはサブビューローによる全般的ないし複数国へのアピール類や共産主義青年インタナショナルに関する報告のほか、上記㉑までの番号を使えば、①、②、⑥、⑦（アイルランドを含む）、⑧、⑪、⑬、⑯の8カ国に関する報告類であった。

ちなみに、スカンディナヴィア・ビューローのストレムのリトヴィノフ宛書簡によれば、1920年2月時点でストレムが接触していた国は、以下である⁽¹⁵⁵⁾。①ドイツ、②オランダ、③イギリス、④ベルギー、⑤フランス、⑥スイス、⑦オーストリア、⑧イタリア、⑨アメリカ合州国、⑩カナダ、⑪メキシコ、⑫フィンランド、⑬エストニア。

ラジッチらによれば、西欧書記局が最大の地理的領域と最長の時間の幅をカバーしていたとある⁽¹⁵⁶⁾。前者については、同局の書簡類がコミンテルン文庫にほとんど残されておらず断定はできないが、中欧中心の活動範囲であり、他の在外ビューローとの接触が頻繁どころか滞りがちとの不平・不満の書簡が散見することもあり、首肯しがたい。

アムステルダム・サブビューローは遠く南アフリカとも交流していたのだが、

ヨハネスバークの国際社会主義連盟の書記アンドルーズ（W.H. Andrews）は1920年6月29日にリュトヘルスへ宛てた書簡の中で、解散決定にもかかわらず「我々は喜んであなたがたと接触を続け、……あなたがたが時折我々に与えることができるかもしれないいかなる情報も受け取るだろう」と記していた⁽¹⁵⁷⁾。ここにもサブビューローの情報伝達に果たした役割の大きさの一端が認められる。

最後に、ポロジンの「日記」そのものから関連する項目を二、三挙げて、論点を補説しておく。

1) ビューローの中心地はドイツにあるべきだ、との KPD の強い意向が示されたのだが、そこには、大きな政治的運動もないオランダが真の政治的作戦本部の中心地ではありえない、その上、オランダ同志たちはいくぶん過大評価されており、彼らは理論的においては革命的だが、しかし実践においてはそうでない、との判断があった⁽¹⁵⁸⁾。

2) KPD 中央（執行部）はラデクの教化のおかげで議会主義的な合法的立場のために闘っており、その点でもオランダ同志に反対している⁽¹⁵⁹⁾。

3) ポロジンは、すべてのインタナショナルな活動は書記局から取り去られ、それをもっぱらロシアの仕事に任せるべきだと提案し、それには J[ames]. も喜ぶだろう、と⁽¹⁶⁰⁾。

第3点目は、ポロジンもまた ИККИ からの派遣密使であったゆえの考えであり、当時彼はアムステルダム・サブビューローとほぼ共同歩調をとっていたにもかかわらず（後篇参照）、この点ではサブビューローと意見を異にしたであろう。第2点目は、上述の ИККИ の方針転換の端緒を窺わせる。そして第1点目の問題こそ、サブビューローと西欧書記局の決定的な対立点であった。滞独中のチャールズ [=フレイナ] と M[urphy] も、ビューローの中心がどこに置かれるべきかの問題で、上述の西欧書記局の非協力的態度もあって、ドイツへの設置には断乎反対し、オランダかスカンディナヴィアかどちらに置くべきかはリュトヘルスの判断に委ねた⁽¹⁶¹⁾。当のリュトヘルスがトランメル宛1919年12月26日付書簡で、ИККИ より支部-ビューロー組織化を指示された旨を伝える

際次のように記していたことは、注目を要する。「その〔組織化の〕考えは、第3インタナショナルの重心が徐々に西欧に移されるべきであるということである」⁽¹⁶²⁾。

その考えを西欧書記局も共有していたことは、『共産主義インタナショナル』ベルリン版にだけだが、創立大会関係文書掲載の中で以下が紹介されたことでわかる。「全般的に派遣代表たちは、執行部およびビューローの所在地はベルリンに属するであろうとの見解であった。しかし、このことはドイツ・レーテ共和国の樹立後はじめて可能であろうというので、さしあたりモスクワが中央とみなされるのは当然である」⁽¹⁶³⁾。ラジッチらは、この考えについてポリシェヴィキの指導者たちが心変わりをし、以前に承認したものを沈黙の中に葬ろうと決したということが、ヨリありそうなことである、と捉えたのだが⁽¹⁶⁴⁾、リュトヘルスへの全権委任そしてその撤回をみても、それは肯ける。

この問題は、コミンテルン第2回大会第10会合（1920年8月4日）におけるコミンテルン規約案の討議の際ウェインコープとレーヴィによって提起された。両者の主張には微妙な差があるが、ウェインコープは、国際執行委員会は現実にはロシアの拡大委員会としてこの地で形成されつつあると言い、その上レーヴィによる執行委員会の所在地としてのベルリン提案に対して、一方で十分に強力な労働運動が存在し、他方で国際情勢についての情報が得られやすいとの理由で、可能性の一つとして賛同した。しかし、両者にとって不運だったのは、ラジッチらがすでに指摘しているように、その提案がフレイナによって西欧書記局批判という文脈から次のように強く反対されたことであった。「執行委員会をベルリンへ移す提案はナンセンスである。ベルリンに西欧書記局があり、それは限定され、狭小で、ある程度一国主義的であり、インタナショナルではなかった」と⁽¹⁶⁵⁾。その「一国主義的」要素は、既述のようにオランダとドイツの両在外ビューロー間の対立の中にも垣間見られるほどの難題であり、アムステルダム・サブビューローの最終評価を下す際には是非とも論じなければならない。

同会合で採択された規約では、第6条「ИККИの所在地は、共産主義インタ

ナショナルの世界大会によって、そのつど決定される」、第8条「ИККИの仕事の主要な部分は、世界大会の決定によって執行委員会の所在地となっている国の党によって負担される」と、モスクワの明記はなされなかった⁽¹⁶⁶⁾。けれども実は、この討議の冒頭、ジノヴィエフを代弁するかのようなブルガリア・テスニャーツィのカバクチェフ(X. Кабакчиев)による発言の中で、アムステルダム・サブビューローと西欧書記局が槍玉にあげられていた。すなわち、両補助ビューローの経験ゆえに我々は、すべての機関およびビューローが直接的にИККИの管轄下に置かれるべきであり、ИККИによって与えられた方針内でのみ行動が許されるようにする必要がある。このやり方でのみ我々は中央集権化され規律化された国際的な共産主義組織を創るだろう、と⁽¹⁶⁷⁾。

すでにこの時、「世界革命」が実現しない限りにおいてだが、コミンテルンは(翌年ホルテルによる小冊子のタイトルにもなる)「モスクワ・インタナショナル」の道を歩みはじめていたと言えよう。

[付記] 本稿は2004～2006年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果の一部である。

注

- (1) 『史淵』144輯, III.2007, 35-76.
- (2) Cf. 山内昭人「片山潜, 在米日本人社会主義団と初期コミンテルン」, 「初期コミンテルンと東アジア」研究会編著『初期コミンテルンと東アジア』(不二出版, 2007), 85-133.
- (3) Cf. 山内昭人「日本社会主義者とコミンテルン・アムステルダム・サブビューローとの通信, 1919-1920年」『大原社会問題研究所雑誌』499号, VI.2000, 48-63.
- (4) Cf. 山内昭人「在墨片山潜の書簡と草稿類, 1921年」同上, 506号, I.2001, 31-69.
- (5) 山内昭人『コミンテルン・アムステルダム・サブビューローの基礎的研究』(平成11～12年度 科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書), III.2001; 同『コミンテルン・パンアメリカン・エイジェンシーの基礎的研究』(平成16～18年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書), V.2007.
- (6) Российский государственный архив социально-политической истории, ф.495, оп.18, д.33, лл. 20-21, Москва (以下РГАСПИ, 495/18/33/20-21と略記する); A. Kan, “Die Skan-

- dinavische Kommission der Komintern 1919-1921,” *JahrBuch für Forschungen zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, 2004/III, IX.2004, 68-69.
- (7) РГАСПИ, 495/1/1/12-13, 15 ; cf. *Коминтерн и идея мировой революции. Документы* (Москва, 1998), 122-124 ; *Политбюро ЦК РКП(б)-ВКП(б) и Коминтерн. 1919-1943. Документы* (Москва, 2004), 27-28. 本稿では、コミンテルン派遣要員らについての略歴は、一部を除いて割愛する。大方が掲載されている以下を参照。B. Lazitch/M.M. Drachkovitch, *Biographical Dictionary of the Comintern*. New, Revised, and Expanded Edition (Stanford, 1986). オシンスキーの略歴は、以下を参照。山内昭人「在露英語を話す共産主義者グループと機関紙『コール』——片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル (IX) ——」『宮崎大学教育文化学部紀要』(社会科学), 2号, III. 2000, 14.
- (8) Г.М. Адиеков/Э.Н. Шахназарова/К.К. Шириня, *Организационная структура Коминтерна. 1919—1943* (Москва, 1997), 11.
- (9) Cf. F. Svátek, “The Governing Organs of the Communist International: their growth and composition, 1919-1943,” *History of Socialism. Year Book 1968* (Prague, 1969), 213 ; G. Zinoviev, *Report of the Executive Committee of the Communist International to the Second World Congress of the Communist International* (Petrograd, 1920), 19.
- (10) Адиеков/Шахназарова/Шириня, 11.
- (11) *Ibid.*, 11-12 ; С. Цвилюк, *Защищая дело Октября. Зарубежные интернационалисты в Одессе. 1917-1920 гг.* (Одесса, 1987), 146 ; 山内「在露英語を話す共産主義者グループ」, 19-20.
- (12) РГАСПИ, 495/1/1/47 ; 495/1/1/48.
- (13) РГАСПИ, 495/1/6/16 ; *Коминтерн и идея мировой революции*, 157-158 ; Адиеков/Шахназарова/Шириня, 11-12.
- (14) Адиеков/Шахназарова/Шириня, 29-30.
- (15) 山内昭人「ストックホルム会議とツインメルヴァルト運動」『史料』61巻5号, IX.1978, 96, 103-106 ; 同「第3回ツインメルヴァルト会議(下)」『宮崎大学教育学部紀要』(社会科学), 46号, X.1979, 29-30 ; 同「在露英語を話す共産主義者グループ」, 2-4.
- (16) РГАСПИ, 510/1/1/20-25 ; Kan, “Skandinavische Kommission,” 53-54.
- (17) ストレムとともに、彼の党同志であり弁護士であったヘルベルク (W. Hellberg) が通商および法律上の代表となった。スウェーデン政府はそれらを認めなかったが、彼らの活動を妨害はしなかった。1920年5月に同政府によって承認されたストレムは、1924年夏まで総領事として活動していく。A. Kan, “Les relations entre les communistes scandinaves et le service diplomatique soviétique,” *Centenaire Jules Humbert-Droz*.

- Colloque sur l'Internationale communiste. Actes* (La Chaux-de-Fonds, 1992), 197.
- (18) РГАСПИ, 510/1/1/20-25; Kan, "Skandinavische Kommission," 52-53.
- (19) O. Grimlund an W. van Ravesteyn, 6.IX.1919, Archief W. van Ravesteyn, Map 9, Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis [hereafter cited as IISG], Amsterdam.
- (20) РГАСПИ, 510/1/1/20-25.
- (21) Адибеков/Шахназарова/Шириня, 12, 16.
- (22) 同ビューローのジノヴィエフ宛1920年9月8日付文書によれば、同ビューローの議長および書記はそれぞれ上記のカルリンスキとフリートである。РГАСПИ, 510/1/1/28.
- (23) Kan, "Skandinavische Kommission," 54-55; A. Kan, "Der bolschewistische "Revolutionsexport" im Jahre 1920 und die schwedischen Linkssozialisten," *Jahrbuch für Historische Kommunismusforschung 1994* (Berlin, 1993), 99.
- (24) Zinoviev, 19.
- (25) РГАСПИ, 498/1/1/1-4; cf. Y. Bourdet/G. Haupt/F. Kreissler/H. Steiner, *Autriche* (J. Maitron/G. Haupt (dir.), *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier international*, v.1) (Paris, 1971), 295-296.
- (26) V. Moritz/H. Leidinger, "Wien als Standort der Kommunistischen Internationale bis Mitte der Zwanzigejahre," *Jahrbuch für Historische Kommunismusforschung 2004* (Berlin, 2004), 38-40; Адибеков/Шахназарова/Шириня, 13.
- (27) Адибеков/Шахназарова/Шириня, 13; РГАСПИ, 498/1/1/1-4.
- (28) РГАСПИ, 497/1/1/86.
- (29) *Kommunismus. Zeitschrift der Kommunistischen Internationale für die Länder Südosteuropas* (Wien), 1. Jg., Heft 11, 27.III.1920, 338; Heft 12/13, 3.IV.1920, 384-390.
- (30) Cf. Moritz/Leidinger, 39-40.
- (31) B. Lazitch/M.M. Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, Vol.1 (Stanford, 1972), 200.
- (32) A. Watlin/M. Wehner, "Genosse Thomas und die Geheimtätigkeit der Komintern in Deutschland 1919-1925," A. Watlin, *Die Komintern 1919-1929. Historische Studien* (Mainz, 1993), 23. ライヒの経歴は、以下を参照。Ibid., 22-23; Lazitch/Drachkovitch, *Biographical Dictionary*, 389-390.
- (33) РГАСПИ, 495/82/1. 本ファイルは現在再び非公開だが、短期間だけ閲覧でき、著書の中で同文書を公表した以下による。V. Loupan/P. Lorrain, *L'argent de Moscou. L'histoire la plus secrète du PCF* (Paris, [1994]), 47.
- (34) РГАСПИ, 495/1/1/81. ただし、4日後に急使が受け取ったダイヤモンド類のループ

り相当額は、決定どおりにはいかなかった（上記予算委員会文書をかつて独占的に閲覧できたフィルソフの最新の研究が紹介している急使の受領書の合計額は、なぜか内訳と合っていない）。窮状の中でコミンテルン本部は国庫から貴金属類を工面しなければならなかった。Ф. Фирсов, *Секретные коды истории Коминтерна 1919-1943* (Москва, 2007), 117.

- (35) Loupan/Lorrain, 47 ; cf. *Коминтерн и идея мировой революции*, 150-151.
- (36) РГАСПИ, 495/1/1/25 ; 495/1/1/31-32.
- (37) “Les Premières années de l’Internationale communiste. D’après le récit du «camarade Thomas» recueilli, introduit et annoté par Boris Nicolaevsky” [hereafter cited as Nicolaevsky], J. Freymond (dir.), *Contributions à l’histoire du Comintern* (Genève, 1965), 13.
- (38) РГАСПИ, 499/1/2/4-7 ; cf. *Die Kommunistische Internationale. Organ des Exekutiv-Komitees der Kommunistischen Internationale* [hereafter cited as *KI*] (Berlin), No.3, 1919, 3-8 ; J.W. Hulse, *The Forming of the Communist International* (Stanford, 1964), 100.
- (39) Адибеков/Шахназарова/Шириня, 13.
- (40) Nicolaevsky, 15 ; Watlin/Wehner, 24 ; Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 145-150. ミュンツェンベルクを中心に1919年11月20-26日、ベルリンで共産主義青年インタナショナル創立大会が開かれ、彼はその執行委員会の書記となる。プロンスキもブラウンの名で、同創立大会において第2議題「世界政治情勢」に関する基調報告を行い、そのあとの討議に、後述するフランク（ウィーン； ゲストとして）およびマルク（ブカレスト）も加わっていた。Unter dem roten Banner. *Berichte über den ersten Kongress der Kommunistischen Jugendinternationale* (Berlin, n.d.), 29-33. アブラモヴィチの略歴は、以下を参照。Lazitch/Drachkovitch, *Biographical Dictionary*, 1-2 ; М. Пантелеев, *Агенты Коминтерна. Солдаты мировой революции* (Москва, 2005), 47-84.
- (41) Watlin/Wehner, 24.
- (42) Nikolaevsky, 3.
- (43) РГАСПИ, 324/1/549/105-106 ; cf. Watlin/Wehner, 25.
- (44) Watlin/Wehner, 25 ; Nicolaevsky, 14-15.
- (45) Адибеков/Шахназарова/Шириня, 13.
- (46) РГАСПИ, 509/1/1/2-3 ; 509/1/1/4-7 ; cf. *Коммунистический Интернационал. Орган Исполнительного Комитета Коммунистического Интернационала* [hereafter cited as *KI*] (Петроград), No.12, 1920, 2215-2218.
- (47) РГАСПИ, 509/1/4/13-13 об.; 509/1/4/37-42.

- (48) Адибеков/Шахназарова/Шириня, 14.
- (49) 山内「在露英語を話す共産主義者グループ」, 6-7.
- (50) 同上, 7.
- (51) РГАСПИ, 495/1/1/74 [未見]; Watlin/Wehner, 23.
- (52) РГАСПИ, 495/1/1/52.
- (53) РГАСПИ, 495/1/1/78.
- (54) Loupan/Lorrain, 47-48.
- (55) “Meegenomen op reis 15 Oct. 1919,” Archief S.J. Rutgers, Map I-1, IISG.
- (56) ループリの換算率は、1918年7月段階では1ループリ=0.25ギルダーであったことから、わずか1年半足らずで約4分の1に急落している。リュトヘルスの換算記録が示すように、ループリの換算率は悪化の一途をたどっており、コミンテルン本部による宝石類のループリ換算見積は注意を要する。
- (57) РГАСПИ, 495/1/1/78.
- (58) РГАСПИ, 495/1/1/77.
- (59) РГАСПИ, 495/1/1/80. アジベコフらは、印刷物やИККИの報告ではИККИオランダ・ビューローかアムステルダム・ビューローとなっていると記しているが(Адибеков/Шахназарова/Шириня, 12)、必ずしもそうとは言えず、とくにオランダ人当事者の方はサブビューローないし補助ビューローと記しており、本稿の表記は引用を除いてサブビューローで統一しておく。下記のように、そこには「不可欠な権威を得るところの国際的な共産主義大会が開催され」、「決定的なビューロー」が任命されるまでの暫定的な役割が意識されていたからであろう。
- (60) 『レーニン全集』44巻(大月書店, 1968), 365, 672; cf. С. Рутгерс, “Встречи с Лениным,” *Историк-марксист*, 1935, No.2-3 (42-43), 90.
- (61) РГАСПИ, 581/1/47/156-157.
- (62) РГАСПИ, 497/2/8/1-7; 581/1/95/33-39; G. Voerman, *De meridiaan van Moskou. De CPN en de Communistische Internationale, 1919-1930* (Amsterdam/Antwerpen, 2001), 77, 86, 494; G. Voerman, “Proletarian Competition. The Amsterdam Bureau and its German Counterpart, 1919-1920,” *Jahrbuch für Historische Kommunismusforschung* 2007 (Berlin, 2007), 208.
- (63) S.J. Rutgers aan W. van Ravesteyn, 6.XI.1919, Archief W. van Ravesteyn, Map 17; РГАСПИ, 581/1/47/14. パルタは一足先1919年2月半ばに帰国していたのだが、それは第3インタナショナル創設をめざす同年3月開催予定の国際会議へリュトヘルスが正式に出席するためにはオランダ共産党からの代表委任状が必要であり、夫に代わってそれを受け取るとともに西欧諸党の代表をも同会議へ招くという使命を帯びての帰国であった。Cf. 山内昭人「ラトヴィヤ・ソヴェト政権と「世界革命」(1918年秋~1919年春)

初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ（上）

——リュトヘルスとインタナショナル（続1）——『史淵』142輯，III.2005，98.

- (64) РГАСПИ, 497/1/10/8a ; 497/1/10/17-20 ; 497/1/10/9-11.
- (65) РГАСПИ, 497/1/11/43 (山内『アムステルダム・サブビューロー』, 61-62) ; 497/1/1/1 (同, 60) ; Archives Jules Humbert-Droz, 0507, Fondation Jules Humbert-Droz, La Chaux-de-Fonds.
- (66) “The First Meeting of the Third International in Western Europe. Reports from Various Countries,” *The Workers’ Dreadnought* (London), Vol.6, Supplement to No.45, 31.I.1920, 1-4 ; Supplement to No.46, 7.II.1920, i-iii.
- (67) Cf. Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 178 ; Nicolaevsky, 15.
- (68) РГАСПИ, 495/172/59/6-9.
- (69) Nicolaevsky, 15.
- (70) РГАСПИ, 499/1/1/1-1 об.
- (71) РГАСПИ, 497/1/10/4.
- (72) Bartha Rutgers (voor S.J. Rutgers) aan van Ravesteyn, 10.XII.1919, Archief W. van Ravesteyn, Map 17.
- (73) Cf. РГАСПИ, 495/172/59/6-9.
- (74) *Bulletin of the provisional Bureau in Amsterdam of the Communist International* (Amsterdam), No.1, II.1920, 1-4.
- (75) *KI*, No.4/5, 1920, 13-19.
- (76) РГАСПИ, 497/2/3/2-3 ; cf. 497/2/8/1-7.
- (77) さしあたり以下を参照。 *Bulletin of the Sub-Bureau in Amsterdam of the Communist International* (Amsterdam), No.2, III.1920, 1-9 ; 山内『アムステルダム・サブビューロー』, 1-53.
- (78) H. Roland Holst, “Documents concerning the International Conference at Amsterdam,” *Bulletin*, No.2, 2.
- (79) *Bulletin*, No.2, 5.
- (80) Roland Holst, 2.
- (81) РГАСПИ, 497/2/2/12.
- (82) *Bulletin*, No.2, 8-9.
- (83) РГАСПИ, 581/1/110/20-35.
- (84) Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 191.
- (85) Hulse, 156.
- (86) Roland Holst, 2-3.
- (87) РГАСПИ, 495/18/28/7-10.
- (88) *Bericht über den 3. Parteitag der Kommunistischen Partei Deutschlands (Sparta-*

kusbund) vom 25. bis 26. Februar 1920 (n.p., n.d.), 69-84.

- (89) РГАСПИ, 499/1/2/20-21 [4頁分の活版印刷リーフレット]; cf. *KI*, No.4/5, 1920, 3-13; 村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第1巻（大月書店, 1978）, 529-538.
- (90) このことに関して、本会議の先駆的検討を行ったハルスは、会議は約20名が参加したにすぎないけれども、ある点で真の代表権をもつ代表の比率の高さゆえにモスクワでのコミンテルン創立大会よりも正当な国際会議であった、とまで記している。Hulse, 154.
- (91) Roland Holst, 1; cf. *De Tribune. Revolutionair-socialistisch Volksblad. Orgaan van de Communistische Partij in Nederland* (Amsterdam), 13. Jrg., No.144, Bijvoegsel, 20.III.1920, 1. なお、1920年1月28日付リュトヘルスのウェインコープ宛書簡によれば、同時点で「テーゼ」は届いたばかりであったが、それはドイツとの密使役を務めていたオランダ共産党員プロースト（J. Proost）によってもたらされた。РГАСПИ, 581/1/47/33-33 об.
- (92) РГАСПИ, 495/1/1/81.
- (93) РГАСПИ, 497/2/8/8-11; 581/1/95/15-17.
- (94) РГАСПИ, 499/1/2/23-25. 正式には、ИККИによる大会招集は1920年4月22日の会議において7月15日開催をめざしてなされる。РГАСПИ, 499/1/6/60-61.
- (95) *Bulletin*, No.2, 9.
- (96) РГАСПИ, 581/1/95/50-51; 497/1/9/23-25; cf. 497/1/5/26-27; 山内『アムステルダム・サブビューロー』, 166-167; Voerman, *Meridiaan*, 88.
- (97) *KI*, No.5, IX.1919, 703-708; 村田編訳, 84-88; cf. Voerman, *Meridiaan*, 88-89.
- (98) Nicolaevsky, 14, cf. 3.
- (99) Cf. Voerman, *Meridiaan*, 92.
- (100) *Коминтерн и идея мировой революции*, 155-156.
- (101) РГАСПИ, 497/2/5/6-8; Voerman, *Meridiaan*, 92-93, 500; Voerman, “Proletarian Competition,” 215.
- (102) РГАСПИ, 581/1/95/10-11.
- (103) РГАСПИ, 497/2/5/24; 497/2/8/8-10; 581/1/95/15-17; Voerman, *Meridiaan*, 93, 501.
- (104) Кан, “Skandinavische Kommission,” 57.
- (105) РГАСПИ, 499/1/5/28a.
- (106) РГАСПИ, 499/1/5/126-126a.
- (107) Cf. *Деятели СССР и революционного движения России. Энциклопедический словарь Гранат* (Москва, 1989), 608.
- (108) РГАСПИ, 495/1/1/85-87.
- (109) РГАСПИ, 495/1/6/17.

初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ（上）

- (110) *Политбюро*, 36-37 ; РГАСПИ, 495/1/6/2-3.
- (111) *КИ*, No.9, 1920, 152-165 ; *КИ*, No.9, 1920, 1381-1392 ; 村田編訳, 103-113.
- (112) РГАСПИ, 495/1/6/19.
- (113) РГАСПИ, 495/1/6/21 ; cf. Voerman, “Proletarian Competition,” 213.
- (114) Loupan/Lorrain, 47.
- (115) Кан, “Skandinavische Kommission,” 58 ; Адибеков/Шахназарова/Шириня, 12.
- (116) РГАСПИ, 497/1/9/2 ; 581/1/95/18 ; cf. 495/1/6/65.
- (117) この決定は『共産主義インタナショナル』に掲載されるのだが、文末の移管については公表が憚られる内容だけに削られた。*КИ*, No.10, 1920, 1659-1660 ; 村田編訳, 128-129.
- (118) РГАСПИ, 497/1/9/1 ; cf. 村田編訳, 129.
- (119) Cf. РГАСПИ, 581/1/47/94-94a.
- (120) РГАСПИ, 497/2/4/155 ; Voerman, *Meridiaan*, 90.
- (121) K. Radek, *Die Entwicklung der Weltrevolution und die Taktik der Kommunistischen Parteien im Kampfe um die Diktatur des Proletariats*. Herausgegeben vom Westeuropäischen Sekretariat der Kommunistischen Internationale ([Berlin], [1919]), 67S.
- (122) РГАСПИ, 497/2/8/1-7.
- (123) РГАСПИ, 581/1/95/22-24 ; 497/1/9/7-9 ; (draft) 581/1/95/19-21 ; 山内『アムステルダム・サブビューロー』, 73-75.
- (124) РГАСПИ, 497/2/8/8-10 ; 581/1/95/15-17.
- (125) РГАСПИ, 497/2/8/11-12 ; 581/1/95/12-13.
- (126) ただし、ストレムによって最近なされた財政支援については言及されていない。Voerman, “Proletarian Competition,” 216.
- (127) РГАСПИ, 497/1/9/10-12 ; 495/172/60/21-23 ; 581/1/95/26-28 ; cf. Voerman, *Meridiaan*, 91, 500.
- (128) Кан, “Skandinavische Kommission,” 62.
- (129) РГАСПИ, 581/1/95/14 ; 497/2/5/18.
- (130) Zinoviev, 19-20.
- (131) *Ibid.*, 20.
- (132) Svátek, 185.
- (133) Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 185-186.
- (134) リュバルスキーの略歴については、以下を参照。山内「在露英語を話す共産主義者グループ」, 17.
- (135) Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 143-164.

初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ（上）

- (136) РГАСПИ, 17/3/100/1 ; cf. Адибеков/Шахназарова/Шириня, 34.
- (137) РГАСПИ, 495/1/8/64-65.
- (138) РГАСПИ, 489/1/14/122.
- (139) РГАСПИ, 495/1/8/65.
- (140) РГАСПИ, 499/1/3/71 ; cf. Адибеков/Шахназарова/Шириня, 30.
- (141) Cf. Watlin/Wehner, 26-27, 41 ; Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 148-149.
- (142) Voerman, "Proletarian Competition," 218.
- (143) Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 253, 256.
- (144) A. Agosti, "The Concept of World Revolution and the "World Party for the Revolution" (1919-1943)," *The International Newsletter of Historical Studies on Comintern, Communism and Stalinism*, No.9-13, 1997/98, 74-75.
- (145) Cf. 山内昭人『リユトヘルスとインタナショナル史研究——片山潜・ポリシエヴィキ・アメリカレフトウィング——』（ミネルヴァ書房, 1996）, 117-133.
- (146) 山内「ラトヴィヤ・ソヴェト政権と「世界革命」」, 122.
- (147) Agosti, 75.
- (148) РГАСПИ, 499/1/3/93-96.
- (149) РГАСПИ, 581/1/110/20-35.
- (150) Watlin/Wehner, 26-29 ; cf. Nicolaevsky, 17.
- (151) РГАСПИ, 499/1/5/126-126a.
- (152) Cf. РГАСПИ, 497/2/2/50.
- (153) "Liste von Materialien von Hutgers [Rutgers]," РГАСПИ, 497/2/8/13-18.
- (154) 山内『アムステルダム・サブビューロー』, 55-186.
- (155) Кан, "Der bolschewistische "Revolutionsexport",," 98.
- (156) Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 149.
- (157) РГАСПИ, 497/2/2/214.
- (158) РГАСПИ, 497/2/7/10-14 ; 497/2/7/83-85.
- (159) РГАСПИ, 497/2/9/1-2.
- (160) РГАСПИ, 497/2/9/1-2.
- (161) РГАСПИ, 497/2/2/50.
- (162) РГАСПИ, 497/2/3/2-3.
- (163) *KI*, No.1, VIII.1919, 38.
- (164) Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 194.
- (165) *Der zweite Kongreß der Kommunistischen Internationale. Protokoll der Verhandlungen vom 19. Juli in Petrograd und vom 23. Juli bis 7. August 1920 in Moskau*

初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ（上）

(Hamburg, 1921), 583-585, 589-590 ; cf. Lazitch/Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, 194-195.

(166) *Der zweite Kongreß der KI*, 603 ; cf. 村田編訳, 221.

(167) *Der zweite Kongreß der KI*, 579.